大正國語讀本

第三修正版

巻五

4a
810
大14

41544

教科書文庫

4
810
41-1925
20000
B9451

教育学科資料室

大正十四年十二月三日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

410
810
大14

保科孝一編

大正國語讀本

東京 合資會社育英書院發兌

広島大学
教
89451
図

大正國語讀本 卷五

目次

一 春宵漫歩……夏目漱石……一
二 島の春秋……吉田絃二郎……七
三 藥師寺の晩春……尾山篤二郎……一四
四 ダンテの祭……柳澤健……三
五 海の鐘……森鷗外……三四
六 オリンピヤの廢墟……（希臘の春）……三七
七 小泉八雲先生……厨川白村……四七
八 小泉先生の舊居……厨川白村……五五

九　修善寺より……尾崎紅葉……六二
◎一〇　ケーザルの乾坤一擲　その一……中川一男……六六
一一　ケーザルの乾坤一擲　その二……七三
一二　ケーザルの乾坤一擲　その三……八〇
一三　上高地の靜境……（日本アルプスと秩父巡禮）……八八
◎一四　天明調……九九
◎一五　母に上る……佐久間啓……一〇一
一六　初期のナポレオン……中澤臨川……一〇四
一七　ルーヴル美術館……櫻井鷗村……一一六
×一八　杉田壹岐……室鳩巣……一二二
一九　蒲生君平と小澤蘆庵……瀧澤馬琴……一二七

二〇　西郷隆盛に與ふる書……山縣有朋……一三五
二一　月雪花　その一……芳賀矢一……一四二
二二　月雪花　その二……一四五
×二三　かりがね……島崎藤村……一五〇
二四　日蓮上人……高山樗牛……一五三
二五　元寇　その一……三宅雄二郎……一五八
二六　元寇　その二……一六三

四

大正國語讀本　卷五

一　春宵漫歩

かすめる空の月夜

春の宵のそゞろあるき。

山里の朧月夜に乘じてそゞろ歩きす。觀海寺の石段を登りながら「仰數春星一二三」といふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出て、足の向くにまかせてぶら〳〵するうち、つい此の石段の下に出た。しばらく「不許葷酒入山門」といふ石を撫でて立つて居たが、急に嬉しくなつて登り出したのである。石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つて佇む

時、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寢ぼけた空の奥から、小さい星がしきりに瞬をする。何になると思つて又登る。かくして余はとう〳〵上まで登り詰めた。

五山
建長寺
圓覺寺
淨智寺
淨妙寺
壽福寺

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊に行つて、所謂五山なるものをぐる〳〵尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭（タッチユウ）であつたらう、やはりこんな風に石段をのそり〳〵と登つて行くと、門内から黄色な衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭い聲

で「何處へ御出でなさる。」と問うた。余はたゞ「境内を拜見に」と答へて同時に足をとゞめたら、坊主はすぐに「何もありませんぞ。」と言ひすてて、すた〳〵下りて行つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭を振りたて〳〵、遂に姿を杉の木の間に隱した。その間かつて一度も振返りはしない。なるほど禪僧は面白い、きび〳〵して居るなと、のつそり山門を入つて見ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を

心得て居たからといふわけではない。禪のぜの字もいまだに知らぬ。唯あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

かうやつて、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに歩いてゐるのは實際高尚だ。興來れば興來るを以て方針とする。興去れば興去るを以て方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。

「仰數春星一二三」の句を得て石段を登り盡した時、朧に光る春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。絶句は纒める氣にならなくなつた。卽座にやめにする。

又平　大津繪の祖。元祿頃の畫家

石を疊んで庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡躑躅の生垣で、垣の向ふは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽かに光る。數萬の甍に數萬の月が落ちたやうだと見上げる。何處やらでしきりに鳩の聲がする。棟の下にでも居るらしい。

雨垂落の處に、妙な影が一列に並んでゐる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じからいふと又平のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで踊つて居る。その影が又本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで踊つて居る。朧夜にそゝのかされて、鉦も撞木も奉加帳も打捨てて、誘ひ合せる

や否や此の山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな覇王樹（サボテン）である。高さは七八尺もあらう、絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ〳〵と繼ぎあはせたやうに見える。あの杓子がいくつ繋がつたらお仕舞になるのかわからない。

今夜のうちにも廂をつき破つて屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來る時には、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちにだん〳〵大きくなるやうにはおもはれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は、世の中にたんと

夏目漱石　名は金之助。英文學者、小說家。大正五年歿、五十歳

あるまい。しかも澄ましたものだ。

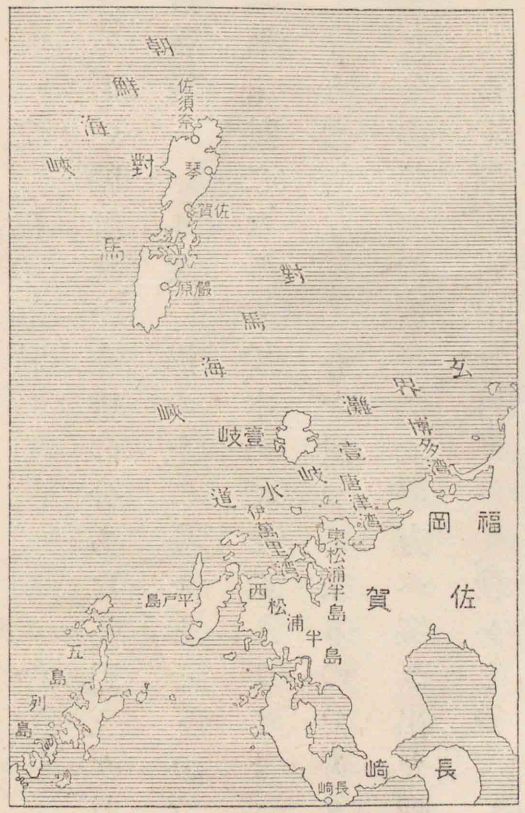
（夏目漱石―鶉籠）

二　島の春秋

恐ろしい朝鮮風が、夜晝の分ちなく二三ケ月の間吹荒んで、幾百尋といふ深い海の上に、矗々とそゝり立つた島の山の地肌も疎（まばら）になるまで、木の葉を落してしまふと、やがて蘇（よみがへ）つたやうな靜な島の春が還つて來るのである。

まだ冬の荒海の名殘が、北の方へ突き出た岬あたりには遺つてゐて、黑い岩山を目がけて、後から後からと寄せる三四丈もある浪をくゞつて鳴く鷗（カモメ）の群の寂しい聲を聽いてゐる間に、既に北から南へと三十五里の間を流れた山の背に

は、柔な春の光が、一つ一つの草の葉を惠むやうに漲つてゐる。山蘭や風蘭の花が、殆ど年に一度も人間の足跡をとゞめぬ高い山の上に薫つてゐたり、名も知れぬやうな一本一本の樹が、どれもこれも自分等の個性を示すやうに、同じ緑といつても、みんながそれ〴〵に異つた嫩葉の色を輝かして來たりするのである。冬の風が荒い



馬酔木（あしび。古名あしぶ）

ので、山が高くなるにつれて、幹は途中から切つたやうになつて、延びきれないで、ずんぐりむつくりと言つた風な形をしてゐる。

馬酔木に似て、もつと背のひよろ高い木が、南京玉でもつらねたやうな或は銀絲でもたらしたやうな可憐の花で、山といふ山、谿といふ谿を埋めて咲く。木犀に似て、木犀よりもつと薄くて柔な葉の間からは、黄色の花がこぼれるやうに、到るところの山で咲いてゐる。幾重にも彎曲した紺青の淵に望んで、垂直に突立つてゐる岩の上には、山櫻の花が日に輝きながら競つてゐる。

この頃である。太陽に向いた山と、太陽に背いた山の香や

空氣の感じが、はつきりと區別されるのは。

波の音が、轟々とまるで遠い嵐のやうに、ひつきりなしに聞えてゐる間にでも、私たちはちよつと立止つて、暗い谷の方に耳を傾ければ、何の悲みも淋しさも知らないやうな鶯の谷渡りなどを幾つも聽くことができる。

博多からこの島に來る船の上に、鶯商人を見るのもこのころのことである。

春は何處の世界ででも早く立易い。山の櫻が散つたと思ふ頃は、島を埋めて、海岸の山には薄紅のつゝじが咲く。山の背には菖蒲の花が咲く。山の背からは、東の方に北九州の山脈や、平戸島が水天髣髴の間に見える。西の方には一

博多　福岡縣福岡市の一部。博多の津の名が古から高い

平戸島　長崎縣北松浦郡。平戸半島に對する大きい島

層近く朝鮮の山が煙つて見える。

雲雀の唄を浴びながら、三尺にも足らぬやうな島の小馬に跨つた五人十人といふ女たちの群が、高原の草を踏みにじつて行くのもこの頃である。

島の人たちの生活は、この頃から活動期に入るのである。濱の石屋根の上には網が乾されて、濱一ぱいに高い杭をたてて、それに幾段にも綱が張られる。そして毎日幾十萬といふ烏賊が乾されるのである。

烏賊の乾場が用意される頃になると、色々の渡鳥が島をめがけて集つて來る。時鳥は晝日中でも、三羽五羽と群をつくつて、漁村の空を鳴きながら飛んで行く。

平戸から松浦、壹岐、博多の沖にかけて、初夏の太陽の光が、白い波路をぎら〳〵と照らすやうになる。

一番鳥賊がとれ出すころになると、内地や朝鮮あたりにゐた何萬といふ漁船が、一時に對馬の港々に集つて來る。そして佐須奈だの、佐賀だの、琴だの、嚴原だの、幾十といふ小港には、荒くれた漁夫の群の船唄が賑ふ。

佐須奈云々　皆對馬の漁港である

鳥賊釣の船が追々内地に歸つて行くと、もう秋風が島と海とをつゝんでしまふ。青い海が寂しい日光に輝くやうになる。朝鮮の島影がほの青く見えて來る。島を遠くに眺めたまゝ立寄らないで、大陸から大陸へと行く汽船が、徐かに水平線の上を行く。白い海鳥の群が、千鳥のやうな可憐の聲を殘して、波の上を雲の中に消えて行くのである。

山といふ山は、銀のやうな芒の波に掩はれる。谿といふ谿は紅葉に燃える。その間を清冽な水が瀨をなして流れる。朝と夕暮には、霧が山をこめて、それが日光の具合でいろいろの色に絶えず變化する。

島の秋で一等うれしいのは月の夜である。甘藷の畑には露が深く落ちてゐる。白い磧からは、霧の底から人聲が聞えて來る。

月に照らされた一つの山を越えれば、必ず淡い霧につゝまれた他の一つの漁村が、暗い影を作つた山の懷に抱かれて、白い海を控へて横たはつてゐる。燈が見えるところに、必

ず島の人々の哀調を帶びた歌がきこえる。

月の夜の漁村の唄が途絶えて來るころは、再び玄海の上に冬の風が荒びはじめるのである。内地との交通が幾日も鎖されてしまつて、暗く低い空の下に、あらしを誘ふ大波が涯しもなくつゞく。

濱の漁夫の家の扉はとざされて、鷗の群が沖から濱の方へあらしを避けてつどうて來る。

（吉田絃二郎――小鳥の來る日）

玄海　玄海灘。九州と壹岐對馬の間の海

吉田絃二郎　小說家。早稻田大學講師

三　藥師寺の晩春

まだ新綠といふには早い頃である。山櫻が散りそめて、八重櫻がこれから咲かうといふのであるから、いはゞ春闌（タケナワ）で

ある。

西大寺で電車を乘換へて、それから二つ目の停留場で私は降りる筈である。西大寺の白い墻がすぐそこに見える。

秋篠へ行く道が、麥と菜の花の間を白く續いてゐる。電車が動くにつれて、すぐ目の前に、菅原のあの傾（カタム）いた重さうな屋根をもつた喜光寺が、それでもぽつと黑く霞んでゐる。そして、御立野の垂仁陵が、こんなところにあつたのかと思ふ程近くにある。何時の間にか唐招提寺の裏を通つてしまつたと見えて、藥師寺の横手にあたる停留場についた。

私は先づ眞直に、東門際にある地藏院へ寄ることにした。こゝは藥師寺の塔頭（タッチユウ）で、そこの若い坊さんは歌を詠む人で

西大寺　奈良市の西一里餘。伏見村大字西大寺にある

秋篠　奈良市の西北一里餘平城村字秋篠にある

菅原　奈良市の西一里。都跡村字菅原

喜光寺　菅原にある。菅原寺ともいふ

唐招提寺　奈良市の西一里。都跡村字五條にある。唐僧鑑眞の建立

藥師寺　奈良市の西。生駒郡都跡村字西ノ京にある

停留場　大阪電氣鐵道西ノ京停留場

あつた。

地藏院の書院から見ると、ちやうど向ふに若草山、春日山一帶の山が霞を隔てて横たはつてゐる。

「若草山はまだちつとも靑くなりませんね」。

「こゝから靑く見えるやうになるのはまだです。ずつと眞夏になつてからです」。

私はなるほどさういふものかと思つた。手狹ではあるがよく作つてあるこゝの庭は、もう旣に春が更けて居る。泉水には緋鯉が浮んで、菖蒲の芽の蔭からかい〳〵と蛙がないてゐる。池の周圍や築山には、よく刈込んだつゝじが澤山植ゑられてゐるから、もう廿日遲れて來たなら眞赤な庭

正倉院　奈良市東大寺に附屬してゐた寶庫。今は御物となる

だつたらうにと惜しいやうな氣がする。

「馬醉木は散つたでせうか」。

「さうですね、この邊はもう駄目のやうですが、春日山の奥に行けば、多分五月頃まで咲いてゐる筈ですよ」。

坊さんは氣輕に立つて、築山の蔭までそれを探しにいつてくれた。馬醉木の花のまだ蕾の時分を私は知つてゐる。正倉院御物の圖案に、それが使はれて居ることも、またどういふ恰好をしてゐるか位のことも知つてゐる。しかし、あの萬葉歌人が「照りて匂へり」といつた花の盛を知らない。あの鈴蘭を小さくしたやうな白い淋しい花が、常綠のひどく密生した葉の間にはさまつて、細かい房をなして咲くの

であるから、或は、には、と、この花よりももつと力のない弱々しい感じをしてゐることだらうくらゐにしか思つてゐなかつた。だがある日の夕方、新藥師寺からの歸途、春日山の中をさまようてそれを見た。なるほどこれならば萬葉歌人の詠んだのも無理はないと思ふほどの感じを、この簇る白い花の間に見た。

新藥師寺　奈良市高畠井ノ上町にある

私はその花の一房を見ながら地藏院で小憩した後、先づ金堂から見た。實は金堂の本尊の、あの不思議な底の知れない漆黒の色が、この日の私の心には、餘り親しいものでなさうな氣がしたので、やめてもいゝくらゐに思うてゐたのであつた。それよりも東院堂の闇浮檀金聖觀音の、茶がゝ

東院堂　東禪院堂。藥師寺金堂の東南東、塔の傍にあり、放生池に望む

つた乳のあたりの幻影と、右の手を心持内に傾けた微妙な調子と、掌の光澤とが、そしてその反り加減の頤と頬が、私をどんなに引きつけるだらうと思うてゐた。だが、金堂の裏の扉の鍵穴へ大きな鍵ががちりと入つた時、流石に身慄ひを感じないわけにはいかなかつた。開かれた扉から、高い敷石をまたいで堂の中の乾いた土を踏んだ時、すぐに本尊佛臺座の玄武が私の目の中に飛込んで來た。

玄武　本尊臺座に、青龍・白虎・朱雀・玄武の四神の浮彫がある

金堂を出てから、若草をふみながら東塔の影を仰いだのはいふまでもない。この塔の水煙の美しさを語ることは、今まで恐らく誰でもやつたことで、陳腐過ぎるほど陳腐だが、それかといつて、あのぴんと張つたやうな九輪の輪が一つ

藥師寺の東塔

一つ重つてゐる上に、薄羽かげろふの羽のやうな感じで大きく擴がつてゐる水煙を見上げた時の美感を、何とか言葉に出して見ないでは濟ませない。下から見たのでは解らないが、六尺にも餘るあの水煙の一片々々に、三人の天女が、下の一人は坐り、中の一人が泳ぐやうに横に流れ、上の一人は頭を下に足を上にして逆立のやうな恰好で飛んでゐる美妙な構圖、そしてそれらの天女の間に、ゆら〳〵と波狀をなした線の數々が、ちやうど箜篌（クゴ）のやうな形をなしてゐるのを想像して見ただけでも、もういゝ氣持になるのである。私は二時間ばかりをそこに過した後に、北の門から唐招提寺の南の門へと急いだ。

子院 藥師寺附屬の小寺

その北の門までの間だが、これはまた何といふ荒れやうだらう。西側はすでに築地は崩されて畑になつてゐるきりだが、東の側には、まだ子院や坊の跡が形ばかり殘つてゐる。だが、それも亦名ばかりで、傾いた門の隙間から見ると、中は田であつたり、畑であつたり、そして向ふには百姓家があつたりして見る影もない。

私は一つの子院の門前に立つた。雜草が一面に生茂つて古瓦の破片が草のなかにごろ〳〵してゐる。それでもまだ春だ。草が短いので、そんなに荒れてゐながら、落瓦の上に蟻が歩いてゐるのが見えるほど四邊が明るく、たんぽゝや紫雲英（ゲンゲ）が草中にまじつて咲いてゐた。この前は、さやう、

もう幾年にならうか、私が、それこそ葬生のおどろ〳〵と亂れたなかに立ちながら、畫もなきつゞける蟋蟀の聲に耳を傾けて亡びゆく物のあはれを感じたのは。

（尾山篤二郎―短歌五十講）

尾山篤二郎　現代の歌人。

四　ダンテの祭

ミケランジェロ廣場　フイレンツェの一廣場。畫家ミケランジェロを記念する名である

アルノ河　フイレンツェを横ぎる河。ピサのほとりで海に入る

フイレンツェ　イタリヤの中部タスカニアの都會

ミケランジェロ廣場の高丘から見た、夕暮のアルノ河とフイレンツェの町との展望は忘れがたい。自分は暫くその和やかな展望をほしいまゝにしてから、傍に待たしてある馬車に身を乘せて、この丘から下りはじめた。

御者は無論、イタリヤ語の外は話せなかつたが、自分は自分で、またこゝの國の言葉は殆どわからなかつた。しかしながら、鞭を鳴らす手を止めては私の方を向いて、御者が頻に話し出す言葉の中には、朧ろげながらに悟り得るものがないでもなかつた。さうした事の一であつた。明日朝の九時から、サンタ、クローチェの寺院の前の廣場で、詩聖ダンテの七百年祭の第一日目の祭典が催されるといふ、意外な喜ばしい知らせを聽取ることが出來たのは。

サンタ、クローチェ　フイレンツェの寺

ダンテ　イタリヤの最大の詩人。神曲の作者。（1265―1321）

本寺　フイレンツェのカセドラル

ちやうどこの日の午前、自分は本寺に近いダンテ通りといふ靜な町に、古い「ダンテの家」を訪ねて、今更らしくこの偉大なる天才の跡を偲んだのであつた。

その祭典が、明朝そこの廣場で行はれるといふサンタ、クロ

ガリレオ　イタリヤの天文學者（1564—1642）
マキアヴェリ　イタリヤの政治家（1469—1527）
ミケランジェロ　イタリヤの文藝復興期の大畫家（1475—1564）
レオナルド　レオナルド・ダ・ヴィンチ同期に出たイタリヤの畫家（1452—1519）

ーチェの寺院も、亦さつき親しく訪ねて行つた場所の一つだつた。「ヨーロッパのなかに於て、最も盛なる死者の集合所」とまで言はれてゐるその寺院は、まことに旅人の目を驚かさずにはおかなかつた。そこには、あの天文學者のガリレオの墓がある。「君主論」の一書に依つて知らぬ人のない、權謀の人マキアヴェリの墓がある。さてはその國の名譽のためにと飾られてゐるダンテや、ミケランジェロや、レオナルドの墓碑がある。「最初そこに訪ね入る時、何人も光榮の愛すべきことをば感ずるならんも、やがては、生者寂滅の空しき念に打たれざるはなかるべし。」と詩人が言つてゐるのも亦、この寺院のなかの數多い墓の前だつた。このサンタ・クローチェの寺院を背景とした廣場の眞中には、大きなダンテの像が立つて居る。そこの像をまへにして、明日賑やかなる祭典が行はれるわけである。折もよくこのフィレンツェの町にあつて、こゝに生を享けた詩聖の生誕七百年の祭典をば、眼のあたり見ることができる自分の身の幸福は、言葉にも盡しがたかつた。それを告げ知らせた馬車の御者までが、訝かしげに此方を見返るほどに、自分は喜の聲を聲高く洩らしたのであつた。

四月二十七日。カーテンを拂つて窓の外を眺めると、うらからかな朝の日は、今しアルノ河の豊かな灰藍色の上に一杯にあふれ漲つてゐる。空はあくまでも碧くまばゆかつた。

ホテルを出て、アルノ河に添うた明るい通をサンタ・クローチェの寺院に向けて歩いて行く。どの家も〳〵窓から三色旗を垂れ下げてゐる。言はずとも知れた今日のダンテの祭を祝ふためだ。同じ寺院へと向ふ人たちも通りに溢れてゐる。數多い寺々の鐘の音もしきりにひゞき渡つてゐる。

目指す寺院に近づくにつれて、人出は益々増して來た。その辻々は、兵士のやうに身を固めた巡査が立つて、その混雜を整理してゐた。それを見ただけでも、この日の祭典の賑やかさが想ひやられるのであつた。

サンタ・クローチェの廣場につくと、もうその廣い土地は人

ラヴェンナ市　アドリヤ海岸にあるイタリヤの都會。エミリヤ州にある

の群で埋められて居た。さうした夥しい人の群の肩越に、あのダンテの銅像が、花環と旗と棕櫚とに飾り立てられながら、まばゆい朝の日を浴びて悠然と屹立してゐるのが眺められた。故郷フィレンツェを追はれて、東方ラヴェンナ市の一隅に僅かに流離の身を支へ、ひたすらにアルノ河畔の故郷に向けて、思慕の念と痛憤の情とをやつてゐたダンテ、しかも遂にそのアルノを見る宿念の叶はざる中に、空しく異郷の土となつてしまつたダンテが、今や彼を追放せる人々の子孫の手により、彼が生前遂に再び踏むを得ざりしフィレンツェの中央に於て、かくも飾られ、讃へられ、祝福されんとして居る。今更めきしことながら、深き感慨のなか

にこの銅像を眺めないわけにはいかなかつた。

廣場をかこむ家々の窓には、何れも三色旗や黄色な大旗を垂れてゐた。その窓によりかゝる人、さては露臺に寄り集ふ人のなかには、一かゝへもあるほどの百合の花、リラの花、薔薇の花の花束を手にしてゐるものも少くはなかつた。

リラ　英語のライラックにあたる。むらさきはしどい

祭に集へる人々の上に撒散らさうといふのでもあらうか。

「花の都」とよばれてゐるフィレンツェ、自分は今、その名を眼で見て居るのではなかつたか。

祭場になつてゐる銅像の前に一區切の土地だけを殘して、廣場一帯はもう身動きのならぬほどに人が込合つてゐる。

その中を「インノ、ア、ダンテ！」「インノ、ア、ダンテ！」と高く叫び

インノ、ア、ダンテ　ダンテの讃歌といふ意味のイタリヤ語

ながら、詩聖を讃へた詩篇を印刷したものをば賣つて歩く男がある。朝とはいひながら光と熱の強い、如何にも南歐らしい太陽に照らされて乾き氣味になつた各自の咽喉をば濡ほさうとして、「香橙！香橙！」と、みづ〳〵しい果實を籠にして賣り歩く女もある。さま〴〵の草花を兩手にかゝへて行く花賣の娘もある。

突然、遙の彼方に當つて樂隊の音がひゞきはじめた。背伸びをしてそちらの方を眺めやると、いまし一團の學生が旌旗をひるがへし、樂隊を先に立てて、この祭場へと繰込んで來るところであつた。が、それは學生の團體ばかりではなかつた。それを先登として、それからそれへと際限のない

までに夥しい團體が繰込んで來た。町の青年會といふのもあらう。商工業者の團體といふのもあらう、學校教師の團體といふのもあらう。恐らくフィレンツェの町のあらゆる團體――更にダンテに關係のあるフィレンツェ以外の土地からの團體さへも――が、こゝに集まつて來たのだつた。その中でも、別けて目をひいたのは少女の一團であつた。いづれも兩手に花をかゝへて、(言ふまでもなくそれは詩聖の銅像の前に飾らうといふのだ。)笑みかはしながらやつて來る稚けなく愛らしいこの群のなかには、折からの樂隊の音に、われ知らず手を振り足を動かして踊りながら歩いて行く子もあつた。自分は思はずかのベアトリーチェ

ベアトリーチェ　ダンテの神曲中に出る神々しい女性

ェの面影をその中に探し出さうとしたのだつた。

銅像の前の相當廣い祭場も、かうした夥しい團體を容れたので、最早一寸の空地もないやうに見えた。もう今はいくら爪立ちして眺めようとしても、十重二十重に重り合つてゐる人の群を越して、銅像の下のほとりに行はれてゐる祭典を見やるといふことは、所詮出來ぬこととして諦める他はなかつた。たゞ銅像の前に、花環が次々と高く積上げられて行くのが遙に眺められた。そのたびに歡聲は爽やかな樂隊の音につれて湧きあがつた。そして手に〳〵草花がうち振られた。とやがて少年・少女たちの朗かに歌ひ出す唱歌の聲がその一隅から起つた。

この旺んなる光景を眺めて居た自分の眼は、何時か熱く濡れて行くのを感じた。自分は若しこれが凱旋將軍を迎へての擧式であるか、若しくは功績を遂げて歸朝する政治家を迎へての擧式であつたとしたならば、格別不思議とは思はぬであらう。それは何れの國に於ても――たとへ冷靜鈍重を以て稱せられるイギリス人の國に於てすらも、格別のこともなく容易に目睹し得るであらうから。然しながら七百年の昔、世にありし一人の詩人のために、たゞ「ディヴィナ、コメディア」一卷を生み出した人の天才そのものたためのみに、想像と感情と思想との美しき天賦そのものをば讃へんがためのみに、かくも盛な熱情の饗宴を張らんとする國は、あゝ、この南歐ラテンの國を他にして何處にあるであらう。自分の身體は感動のために顫へさへもするのだつた。

デヴィナ、コメディア　ダンテの傑作の名。神曲

この日一日、フィレンツェの町は、隅々までもダンテ祭らしい賑はひの行きわたらぬ所とては無かつたといつてよかつた。旗と花とはあらゆる窓にあつた。學生たちの歌ふ聲はあらゆる通りにあつた。

――夜更けるまでアルノ河畔の旅舍の自分の枕許には、ポンテ、ヴェッキオの橋上でも渡つて行くらしい若々しい歌聲が絶えず傳つて來た。自分は思ふともなしに、またしても生れた國のことを頭に浮べた。溜息は自然と洩れて出

ポンテ、ヴェッキオ　アルノ河に架けた古い名高い橋

柳澤健
現代の詩人。パリー日本公使館書記官

ドイツ詩人デーメルの詩（1863—）

た——。

（南歐遊記—柳澤　健）

五　海の鐘

漁師が　賢い伜を二人持つて居た
それに歌を歌つて聞かせた
「海に不思議な鐘がある
その鐘の音を聞くのが
素直な心にはひどく嬉しい」

一人の伜が　今一人の伜に言つた
「おとつつあんはそろ〳〵子供に歸る

あんな馬鹿な歌をいつまでも歌つてゐるのは何事だ
己は舟で隨分度々暴風の音を聞いた
だがついぞ不思議な鐘は聞かぬ」

今一人がいつた「おれたちはまだ若い
おとつつあんの歌は深い記念から出てゐる
大きい海の底まで知るには
澤山航海をしなくてはならぬと思ふ
そしたらその鐘の音が聞えるかも知れぬ」

そのうち親父が死んだので

二人は明るい褐色の髪をして海へ漕出した
さて白髪になつた二人が
ある晩港で落合つて
不思議な鐘の事を思ひ出した

一人は老いこんで不機嫌にかういつた
「おれは海も海の力も知つてゐる
おれは體を臺なしにするまで海で働いた
隨分儲けたことはあるが
鐘の鳴るのは聞かなんだ」

森鷗外
名は林太郎。醫學博士。文學博士。大正十一年歿、六十一

オリンピヤ
ギリシヤのツオイス神を祭つた地で、オリンピヤ大競技の行はれた地。エリスにある

トリエストロイド
オーストリヤの汽船會社の名。この港はアルバニアの西岸のコルフ島のコルフ港である

今一人はかういつて若やかに微笑んだ
「おれは記念の外には儲けなんだ
海に漂つてゐる不思議な鐘がある
その鐘の音を聞くのが
素直な心にはひどく嬉しい」

（森　鷗外譯）

六　オリンピヤの廢墟

一

ギリシャの汽船が一隻碇泊してゐる。イタリヤ船が今入港した。トリエスト、ロイドのチロル號がその後につゞく。

人間と鷗とがざわつく。

乘船は愉快なものでない。我々は一隻のボートの、山のやうな積荷のかげに押込められた。大波が、積みすぎたこの船を覆しはしないかとはら〳〵させる。船が動き出す。徐々として、コルフの町、コルフの島は、この船に添うて走り去る。古い城壘、海ぞひの散歩道路、キルケの園――そこに滯在中幾度となく私はキルケの園を逍遙した。そのキルケの園も走り過ぎる。私は望遠鏡をとつて、もう一度、今は影につゝまれたその美しい場所を顧みた。そこには古代殿堂の遺蹟が淋しく殘り、私は望みがたいほどの幸福な瞬間をその場所に得た。あそこからは度々船が通り過ぎる

キルケの園　コルフ島にある國王の庭園

のを眺めたが、今は自分の身がその船に乘つて通り過ぎるのだ。太陽は今巨浪のかげに沈まうとして、あの園の薄暗い梢のあたりにかゝり、地獄の火のやうな盛なかゞやきを一切の物の上に注いでゐる。船が進むにつれて、私はある一つの考――自分は今黃金と象牙もて作られたツオイスの棲處に向ふ巡禮の途にあるのだといふ、唯一つの考で胸がいつぱいになる。

パトラスに上陸してから我々の通過するエリスの風景は、私を故國にある思にさせる。右手の赭い大地の背後には、信じられないほど燃えかゞやく色彩の海が見える。その海に、青色の靄のやうに、島々がはつきりと浮ぶ。一行は丘

ツオイス　ギリシヤの神の最高の權威のあるもの。オリンピヤのツオイスの神像は、黃金と象牙でつくられてゐた

パトラス　エリス西海岸の港

エリス　ギリシヤ半島の西北角の地

に添うて乘合馬車に運ばれて行く。低い山並、それから葡萄畑の打續く平原が開ける。左手の連山は、廣い谷間の背後に退いて、その雪を頂いた峰々で谷を圍んでゐる。見渡すかぎりの綠の草原が眼を樂ませる。不意に樹木が現はれた。所々に突立つて、節だらけで廣い枝を張つてゐる。それは確かに櫈だ。ドイツ櫈だ。が、ドイツにあるのとはまるで似もつかぬほど古く、どつしりとした櫈である。それから一時間もこの櫈の林が續く。しかもまだ葉を着けない櫈の梢は、相互に廣く離れてゐて、隨分廣くはびこつてゐるが少しも觸れないほどだ。寂しい牧場の間に羊の群を連れた牧人が折々姿を現はす。

オリンピック、デー　ツォイス神の大祭に行はれた、四年毎にシーヤ全國の大一回あるギリ競技の日

澤山の同行の中に交つてゐながら、自分一人が、ある大規模の祭騷ぎを目あてに歩みつゞけてゐるやうな氣持になつた。そして全く無意識に、オリンピック、デーの幻影が、段々と濃くなつて來る。――一人の若いギリシャ人の頭と裸の腕、叫喚、祈願、馬のいなき、急霰のやうな喝采、汗を拭ふ角鬪者。戰のために緊張して、超人的な努力のために苦惱してゐる顏。雷鳴のやうな馬蹄の轟き、車輪の音、――一切が聯絡なく電光のやうに、また斷片的に――。

二

オリンピヤに來た。荒果てたこの祭場から見渡せば、たゞアレッポ松の柔な松風だけが聞える。その松の林はクロ

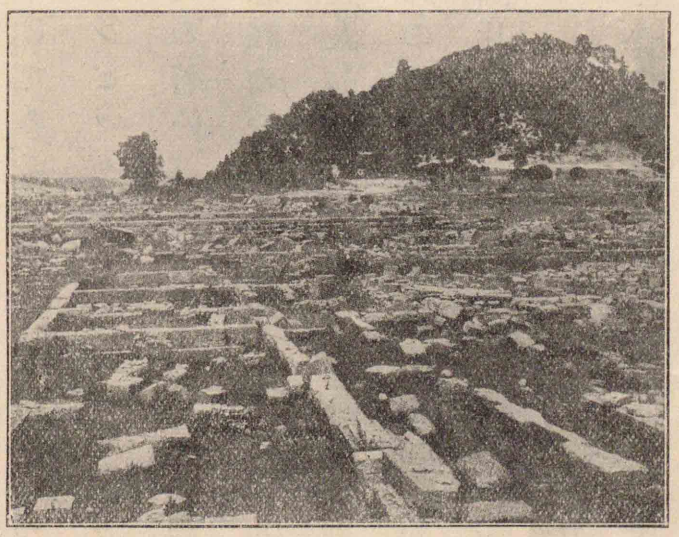
クロノスの丘　オリンピヤの谷の側の丘陵

アルフォイオス　オリンピヤの谷

ノスの丘を掩ひ、處々この古い神域の廢墟に、その低い梢を伸ばしてゐる。

この懷しいアルフォイオスの小谷は、歎賞の思に胸を躍らせて見るのでなければ、取るに足らないつまらぬものだ。川の向ふは低い丘で、こちらも亦低い山並である。それは松林や乏しい牧場がある牧者の爲の小さい谷に過ぎない。

オリンピヤの廢墟



アルフォイオスの彼方の山

腹は、褐色に彩られてゐる。暖い純粋な春の日ざしは、もはやこの廢墟までは屆かない。二羽の鵲が樹から樹へ、圓柱から圓柱へと飛ぶ。一羽の郭公が、クロノスの丘の梢から呼びしきる。千九百七年四月十二日の、このオリンピヤの郭公を、私は永久に忘れないであらう。

暗黑と冷氣が逼つて來た。梢に吹く微風のそよぎは、絶間なくかすかな沈んだ音樂を奏する。それは永久に目醒めぬ深い眠に囚はれてゐるものの、ひそやかな吐息、夢うつつのさゝやきだ。生命は太古の昔から、この眠の中に沈んでゐるやうに思はれる。

全く暗くなつた。私の心の中には益〻幻めいた競技の印象

が鮮かになる。こゝかしこ、夜の大氣の中から、走者や鬪者の叫が聞えるやうだ。喧騷と劇動とを感じる。

不意に蘆笛の素朴な音がひゞく。大方牧童が吹くのであらう。その音を耳にしながら私は宿に赴く。

三

朝は新しい芽生や色々の野の花の匂がする。旅舍の周圍に雀が騷ぐ。美しい風通しのよいこの家の前庭に立てば、オリンピヤの廢墟をばつゝむあの狹い懷しい谷が見渡される。

乏しい小徑は、到るところの丘の上や、丘と丘との間に曲折してゐる。そしてアルフォイオスに注ぐ一つの流と、帶の

やうにからむ。小さい隊商の騾馬や驢馬の隊伍が、姿を現はしては消えて行く。その鈴の音は、隊が見えない前から響き、その姿が見えなくなつた後にも尙響く。大空には條雲がたなびいて、アルフォイオスの鳶色の盆地には羊の群が草を食む。

アネモネ　翁草

クロノスの丘に登る。松脂の匂がする。二三羽の小鳥が若枝の間に美しく鳴きしきる。松の梢の下には柔い常磐木が繁つてゐる。私は血のやうに赤いアネモネ種の草花を摘み、二十呎にもわたる長い毛虫の列を跨いだ。

オリンピヤの礎と廢墟とが脚下に見える。かつては黃金と象牙のツオイスが立つて居た向ふの殿堂の敷石の上に、

一人の小兒が遊んでゐる。樂げな足取で、かつてはツオイスの神像の置かれた場所、――それを見たものは一生幸福で暮せるといふ諺のあつた希世の藝術品の置かれてあつた場所を跳びまはつてゐる。

さゝやくやうに、又夢のやうに、松は頭上で鳴る。羊の群の鈴の音は、アルペンの牧地に於けるやうに到るところから響いて來る。それに和する廣い砂原の中に聞く一條の流のせゝらぎ、その岸べの淀みになく蛙――。

アルペン　アルプス山地

思を天上に向けて、私は再び忘却と廢滅とに息づく草場の谷へ徐ろに下りた。足は美しい草地を掩ふ灰色の廢墟に入つた。見渡すかぎり柔い綠と黃色の谷間の姫百合が咲く。昨日の鵲が、また眼の前を飛んで行く。ツオイス殿堂の圓柱は崩れ落ちたまゝ横たはつてゐる。なごやかな朝日の光に、ぬくみを帶びた積石のまはりに、草花の匂が高い。私は矢も楯もたまらなくなつて、盜人のやうに戰々兢々として、殿堂の近くのオリーヴの若木から、その神聖な一枝を折つた。

希臘の春　ドイツの劇作家ハウプトマンの紀行である

（山口左門譯―希臘の春による）

七　小泉八雲先生

小泉八雲　本名はラフカディオ、ハーン。詩人。東京帝國大學文科大學講師。明治三十七年歿。五十五歳

「贈從四位小泉八雲」とかう書けば、知らない人は日本人かと思ふだらうが、小泉先生の血管には、日本人の血は一滴も流れてゐなかつた。美しい神祕と空想との世界に生きるケ

ケルト民族　ヨーロッパの一民族でイングランドの一部とアイルランドに住む

三十年程前　明治二十三年　ハーパース社　米國ニューオルリーンズ州の書肆

ルト民族のアイルランド人を父とし、昔歐洲の花やかな藝術と文明とを生みだしたギリシヤ人を母とした純粹なる西洋人であつた。

アイルランドに育ち、フランスに學び、米國に人となつて、四海に家なき飄零の孤客であつた先生は、東海の果にありと傳ふる蓬萊の國に憧れて、今から三十年程前、始めて我が日本の國土に來られたのである。それはハーパース社

小泉八雲

の一通信員としてであつた。後、出雲に居られた時、歸化して小泉八雲と名乘られた。近代英文學史上に於ける散文の巨擘として、歐米の文壇には、先生のラフカディオ、ハーンといふ本名の方が轟き渡つてゐる。多少讀書の趣味を解し、或は苟も日本の現在を知れる英米人にして、先生の名を知らないものは殆ど無からう。

日本を今日の如く西洋諸國に名高くしたのは、必ずしも數次の戰勝と國運の隆昌とのみではあるまい。これには先生の絢爛婉美の麗筆が與つて力ある事を思はねばならぬ。見よ、唯觀光を目的として來朝する英米人の十中八九までは、先生の著書の愛讀者である。或は少くとも其の一二を

必ず行李の底に納めてゐる人たちである。

朝廷が國家に對する功績を嘉せられて、故人に贈位の沙汰があつた時、たとへ歸化したとはいへ、純然たる白人を之に加へさせられた事は、未だ曾てわが國の史上に類例なき聖代の慶事であつた。

先生は如何にも風采の揚らない人であつた。痩身矮軀、實に白人には珍しいほど小柄の人であつた。いつも前屈みに背を圓くしてひよこ〳〵と歩いて居られた。兩眼殆ど視力なく、左は盲目、右は眼球が大きく飛出して、それがまた強度の近眼であつた。時々、極めて稀に、衣嚢から片眼鏡を出して、ちよつと右の眼に當てられる。その稀世の名文に

寫された日本の文物・人情・社會等の精透なる觀察は、すべて此の弱い眼に片眼鏡を當てられる僅か十秒二十秒間の凝視の結果であつたのだ。大きな眼玉をぎよろつかせてゐながら心眼の盲ひた凡俗には、とても見えない或物を、先生はかうして常に鋭くもまた敏く觀破せられたのであつた。

帝國大學の講師として、先生は年々歳々新しい題目で、新しい講義をせられた。固より準備にも相當に骨を折られた事であらうが、美しい、そしてよく整つた明快な講義の文章は、皆卽座に、卽興的に先生の口から出たものである。學生に書取らせるやうに、考へながらゆつくりと、併し少しの淀みもなく語られた。時々は卽興の散文詩ともいひたい美

しい文句や、奇拔な警句が、口を突いて出るのであつた。　咳唾これ詩といへば古からう。　錦心繡腸、これを織りなせる五彩絢爛の絲をほごして、繰れども繰れども縷々として盡きざる趣は、實に鮮かであつた。　銀鈴を振る如き其の聲は、また其の文の美しきが如くに美しく、抑揚高低にさへ何の不自然もなかつた。　斷續しつゝ、一言又一句、皆よく聽者の胸底に詩の靈興を傳ふるに足るものがあつた。　ふと目を擧げて先生を見る時などには、大抵窓外を眺めながら、講壇のあたりをあちこちと靜に歩いて居られた。

天才といへば不規則な者のやうに心得てゐる人もあらうが、勤勉努力の人であつた先生は、非常に几帳面で、鐘が鳴ると間もなく重さうな風呂敷包に、美しい裝釘の詩集や文集を幾冊も入れたのを提げて、あたふたと教室に出て來られる。　講壇に上つて一揖し、ごく低い澄みわたつた聲で、「グッドモーニング、ゼントルメン」といひながら、風呂敷包を解かれるのが常であつた。　書物のうち引用すべき箇處には各しるしの紙が挿んであつた。　時間の終に近くなつて、その日、講義すべき部分が終りかける事があつても、先生は必ず鐘の鳴るまで何かしら話された。

講義の間の休憩時間には、獨りで校庭をぶら〳〵と逍遙して居られた。　東京の大學には、あの地所がもと前田侯の舊邸であつた時代からの、古い〳〵大きな池がある。　幾百年

の齡を重ねた鬱蒼たる喬木に取卷れて、淀んだ水は溷濁の色をなして、何時も黑かつた。池の彼方の小山の上には、俗に御殿と稱する集會所の古風な建物がある。先生が最も好まれたのは卽ち此の池畔の逍遙で、例の前屈みに、そのあたりを歩みながら、なた豆の日本煙管や葉卷を燻らして居られるのが常であつた。近づいて敎を乞ひたい事があつても、私たちは先生の靜思を妨げることを恐れて、滅多に側へは行かなかつた。落葉を踏みながら低徊して居られる其の姿を遠くから望んで、先生の腦裏を往來してゐる美しい幻想の、何物であるかを想像して見ることもあつた。

御殿　この時の建物は震災で大正十二年に燒失した

景色を見られても、先生には殆ど視力がなかつたから、常に

煙靄模糊、さながら淡彩一抹の風景畫に對するやうに見えたであらう。目には見ずして心に見られた其の印象は、遂に全き藝術的表現を得て、色彩ゆたかなる文字に寫されたのだ。鋭敏なる其の感性は、却つて此の極めて強い近視眼の爲に幸せられ、部分的なる細微の點を拂拭し去つて、一幅の全景を心裡に活躍する効果を收め得られたのである。

（厨川白村―小泉先生そのほか）

厨川白村　名は辰夫。英文學者。京都帝國大學敎授であつた。大正十二年四十四歳

松江城　出雲の國松江市の北郊末次村にあつた。松平氏の居城

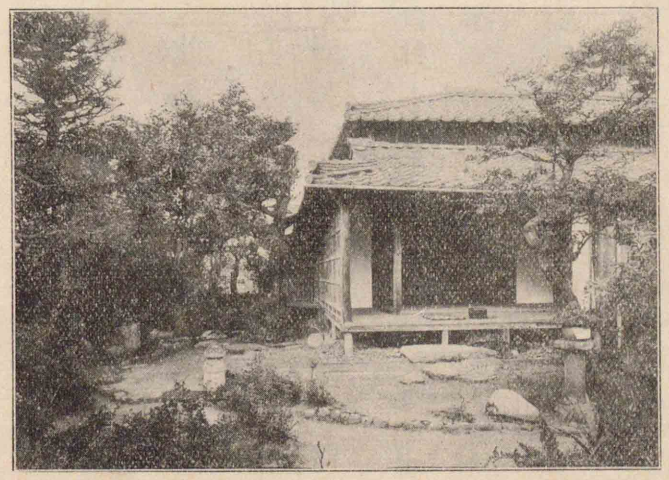
八　小泉先生の舊居

松江城址の美しい青葉を照す午後の日ざしが傾く頃、靜な濠端（はばた）の或家の門に私の車は止つた。それは如何にもさむ

らひの敗殘凋落の跡を想はせる家中屋敷の一つであつた。古びた門構と云ひ正面の玄關と云ひ、封建時代その儘の物であつた。これぞ小泉八雲先生の舊居である。

正面の玄關の左手に四疊があつて、それは南の方の小さい庭に面してゐる。苔むした石燈籠や庭石も、かつては先生が飽かず眺められたものであつた。殊に緣側に近い處にある百日紅だの、珍しい老木の木蓮だ

小泉先生の舊居



のは、先生の殊の外なる愛樹であつたと聞くさへ懷かしい。樹木の精の神話を語つた古代のギリシャ人のやうに、先生もまた草木に宿る生命に強い愛惜の念を持たれた。後年東京に移られてからも、或る寺院の老木を一握の黃金に代へて惜しげも無く伐りたふさうとした俗僧を見て、ひどく怒られたと云ふ話がある。先生はその深い愛の生活、强大な感情生活のうちに、自然と人生と超自然のすべてを抱擁して居られた人であつた。

その次の間の十疊は、先生が新婚の樂しい日を送られた茶の間であつた。座蒲團に坐つて、日本の煙管で日本の刻煙草を吸ひながら、奧さんや來客と、打解けて語られたのは此

の室であつた。この家の持主であり現在の主人である根岸さんは、私を此の部屋に通して色々の話をせられた。日本における先生の舊居の地としては、この松江のほかに、熊本時代のもあれば、東京の大久保の邸もある。しかしこの出雲の地は、日本に歸化せられた先生に取つては特殊の意味がある。天外萬里漂浪の孤客として、その頃はまだよく内情を世界に知られなかつた遠い〳〵日本の、しかもまた山陰の片ほとり、夢と影との神話の都に來て、そこで舊藩士の女小泉氏を聚られた。英米の社會からは全く韜晦し去つて、突如として此の地から、あの最大の名著「日本瞥見錄」二卷を公にせられたのであつた。作者は果して何處にあ

ロバート、ルイス、スティブンスン（1850—1894）

サモア　南太平洋にある群島

る如何なる人ぞと、海のかなたの文壇の驚異となり、はてはラフカディオ、ハーンその人の實在をすらも疑はれた時があつた。先生と同じく近世散文の巨頭であるロバート、ルイス、スティヴンスンも故國スコットランドを出てからは、足跡天下にあまねく、米國で結婚してのち、太平洋をさまよひ、はてはサモアの島に世を終るまで、後の研究者はその足跡を辿るのに沒頭してゐる。私は松江に於ける先生のこの舊居の地が、南洋のサモアに於けるスティヴンスン終焉の地の如くに、今後は益〻多くの文學巡禮者の驚嘆と好奇の念をひく事であらうと思ふ。先生自らに於ても、その樂しいゆかしい思出と愛惜とが、特に松江の此の家から離れな

かつたものと見えて、後年熊本から東京帝國大學に轉任せられる途中――まだ全く山陰地方に汽車の便の無いころ――わざ〳〵廻り路をして此の第二の故郷を訪はれ「我が家に歸つた」といつて喜ばれたさうである。

この茶の間に接した北向の六疊の一室が、先生の書齋であつたといふ。すべてが閑寂な古びた、いかにも士族らしい空氣に滿ちた部屋である。障子を開けて緣側に出ると、そこの庭には小さな池があつて、まんなかに一本の松を植ゑた小島がある。裏手の方は以前しばらく模樣がへしてあつたのを、近頃根岸さんがまた先生在住の頃の舊態に復せられたのださうだ。庭の左の方にある土藏を指しながら、

根岸さんは色々の話をされた。

「この池の中には隨分澤山蛙がゐたさうですが、それを捕らうとて、藏の後の方から蛇だの鼬だの出て來たもんださうです。時々蛙が捕られると、あはれな悲鳴をあげるので、その時は先生の一家が皆飛出して來て大騷をしたと奥さんが話されました。それで先生は時々食べのこりの肉を皿に入れて石段に置き、蛇や鼬に與へられました。私が馳走してやるから蛙を捕るだけはよしてくれよと、先生はいつもいはれたさうです」。

さう云ふ事を根岸さんは話された。裏の籬を越えて右手に見えるのが赤山の杜で、それから聞える鳩や杜鵑の聲に

山中鹿之助　戰國時代周防尼子氏の臣。毛利氏に敵し、天正六年に殺された。三十四歳

耳を澄ましながら、先生はこの書齋に引籠つて、瞑想もし、讀書もし、創作もせられたのであつた。　また正面はるかむかふの方に、樹間を洩れて見える山が山中鹿之助の城址ださうである。

ゆつくり話を聞いてゐる間に、日は暮れさうになつた。　再び部屋に歸つて座に就くと、もう人の顔がぼんやりする程にほの暗かつた。　私はこの夢の國に來て夢の家をたづね得た事を喜びながら、暫くして辭し去つた。　門前の濠の水は深く濁つて、青葉のゆふべの影を宿してゐた。

（厨川白村）

九　修善寺より

頼家　頼朝の長子。二代將軍となり、後、時政等の計によりて廢せられて修善寺に弑された

時政爺　頼朝の外舅北條時政

尼將軍　源頼朝の夫人政子

再啓。　昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景初めて傘さして川向の小山なる頼家公の墓を拜し申候。　見るも愴然たる荒れはてし藪蔭に、空しく殘る一片の石、時政爺の邪慳何ぞ今に執着して假さざることかくの如きや。　あはれ慘禍を生前に極め、恥辱を末代に曝され候事、御身一たび征夷大將軍の顯榮にも居たまひつる御運を以てして、如何なる前世の御宿業にやましくけんと、低徊去るに忍びかね候。

墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。　これこそ公の奥津城にて、現在の五輪塔は後人の御墳無きを慨きて、假に建てたるものなりとの考證有之候。　されば右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢、亦そゞろに懷古の暗涙を催さしむべき

蒲冠者
源範頼

ものに候。蒲冠者の墳は未だ弔はず。直ぐ隣に候へども、修禪寺にも參詣致さず候。追て一見の上申上ぐべくと存候。

此の日は一日閑居の餘、入浴七度に及び、剩へ連夜の按摩尤も勁く、全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて徹夜眠る能はず、黎明初めて交睫して、覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣玲瓏玉の如く、踊躍して獨鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、誤りて三脚の腰部を挫き折り、尠からず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀨に踏入り、ピント合はせ候が、手間取り候程に、水中の赤脚寒に堪へず、而も來浴者頻々として、然るべからざる處に長き布を飜し、或

は目障りの邊に着物を脱放しなど致し、始終ピント安を妨害せられ、技師の難澁之に過ぎず候ひき。辛うじて一照致候へども、印畫の安否甚だ心許なく存候。

それより去りて、川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる坂道の中段に機械を立て候處、崖下の馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢之に道を讓るべく餘儀なくせらるゝため、倥偬の間に速寫機を拈りて立退き申候。

此の寫眞修行の前、人の需に依りて少々麁筆を揮ひ申候。

然るに、僻境の悪箋用ふべからずなど不足を申候處、亭主の才覺、襖に貼殘しの地紙を裁ち持來り候に、居然たる檀紙金砂子の好短册を得候こそ、風流此の上なく感心致候。

二日の雨にて椎茸出で來候へば、味淋醤油の附燒に致候。今は春子のすがれにて、肉薄く、氣も亦微には候へども、山厨の佳味侮るべからず。平椀中常に見る所の陣笠の如き物とは、箸を同じうして論ずべきにあらず候。本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆・草餅を貰ひ、夜に入りて友人より新杵の一折を贈られ候。胃病の人、毎に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふなかれ。草々不盡。

（尾崎紅葉）

尾崎紅葉　名は德太郎、明治三十七年歿、年三十八

天の將に大任を云々　天將レ降二大任一於是人也、必先苦二其心志一勞二其筋骨一、餓二其體膚一、空乏其身、行拂亂其所爲一。（孟子告子章句下）

一〇　ケーザルの乾坤一擲　その一

「天の將に大任をこの人に降さんとするや、必ずまづその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その體膚を餓ゑしめ、その身を空乏にし、その爲す所を拂亂せしむ。」と。英雄は昔から荊棘の中に生れて、遂に大業を成すものである。しかもその一生を通じて、必ず驚天動地、乾坤一擲の大快事を捲起さなければ止まない。これこそ偉人が、その存在を天下に叫號して、萬民を驚倒せしめる一大警鐘なのである。

ケーザルは門閥の家に生れた。けれども人民を支配する權力は少しも與へられてゐなかつたがために、ローマの第一人者となつて全世界を支配しようといふ心の滿々たる彼は、その野心を果すまでには實に苦心慘憺たる行路を辿つた。彼はつとめて公衆の面前に出ることを忘れなかつ

ケーザル　ユリウス、ケーザル。ローマの政治家で軍人（B.C. 100—45）

た。さうして彼の有する天才的雄辯と、豊麗な詞藻と聰明な機智とで、常に群集の喝采を博した。又彼は漸くにして得たイダールの官職を利用して、莫大な私財を擲ち、宏大なる演技場に數百の鬪士とアフリカ産の獅子とを格鬪せしめて、物見高いローマ市民に無料で觀覽せしめたり、又數萬金の負債をものともせず、一大園遊會を開いて市民を饗應したりした。さうして墮落した市民の甘心を買つて、その名聲を盛にし、遂に貧民黨の首領となることを得たのである。けれども彼は決して言論政治の下に見るやうな、ひたすら煽動を事とする野心家ではなかつた。彼は當時ローマに於て、第一流の法律家であり、政治家であり、文章家であ

イダール　ローマ市中の公共建築物・市場・競技場等を監視する役、警視總監に似たところがある

る上に、更に秀でた軍人として、體力雄偉、精力絶倫、しかも事に當つては奇策縱横の大將軍であつた。彼はポンペイウス及びクラッススの二人と謀つて、その巧妙なる政治的手腕を揮つて三頭政治を形造つたのである。しかしながら、ローマの天下を三人で支配するといふことは、ケーザルのもとより欲した所ではなかつた。彼はローマの第一人者たらん希望を抱いてゐたのである。それ故に彼は、更に海外侵略によつてその偉勳を輝かし、軍隊の力を掌握し、又ローマに分捕品を多く齎して、その聲望を大ならしめようとした。そこでガリヤ征伐を思ひ立つたのである。

ガリヤは今のフランスの地で、その頃は蠻族の蟠居してゐ

ポンペイウス　ローマの將軍で、且政治家（Bc. 106—48）

クラッススローマの富豪で政治家（Bc. 115—58）

た地方である。ケーザルは此處に八年間の戰鬪を試み、城塞を陷るゝこと凡そ八百、ガリヤの部族三百を征服し、蠻民九十萬を捕虜とし、百萬を殺戮して、山の如く累積する穀物と財寶とをローマに輸送した。さうしてその聲望と武勳とを以てして、彼が豫期したやうに、遂にローマ第一の英雄と推稱さるゝに至つた。ケーザルの名聲は正に旭日昇天の勢である。然るにこの時、突如として彼に反對するものが起つた。それは政界三頭目の一たるポンペイウスである。ポンペイウスはケーザルの聲望を快く思はなかつた。その上彼はケーザルの武勳が、やがては自己の地位を危からしむるものなることを思つた。そこで彼はケーザルの不在に乘じて、當時政權の把握者なる元老院議員を說き、又有力なる富豪及び富民黨を悉く籠絡して、「ケーザルが、ガリヤを征服して强大なる兵權を掌握するのは、やがて彼がローマを支配せんとする野心の發端である。」と主張し、遂にケーザルに對して、「速に軍隊を解散して歸國すべし。若し命令を奉ぜざる時は、國敵と見做して汝を討伐せん。」といふ召還命令を、元老院の名を以て出したのである。

ケーザルにとつて、これは實に晴天の霹靂である。若し元老院の命を奉じて、このまゝ軍隊を解散して歸國せんか、彼は身に一兵を從へずしてローマ市に入らねばならぬ。かくすれば遂に敵黨の藥籠中のものとなつて、直に殺戮せら

れるか、又は海外に放逐せられるは必然である。しかも若しこの命を奉ぜずしてガリヤに止まらんか、彼は國敵となつて、元老院・富民黨及び精英なるローマの兵と戰はねばならぬ。さうして遂には一敗地に塗れて、再び起つ能はざらんも測られぬのである。これ實にケーザルにとつて危機一髪の時といはねばならぬ。彼は進んでローマを敵とすべきか、退いてその藥籠中の物となるか、二途に心を碎きつつ行軍を續けて、遂にルビコンの河邊まで來た。あゝルビコンの河、彼が乾坤一擲の大事業は、この河の岸に於て決せられたのである。

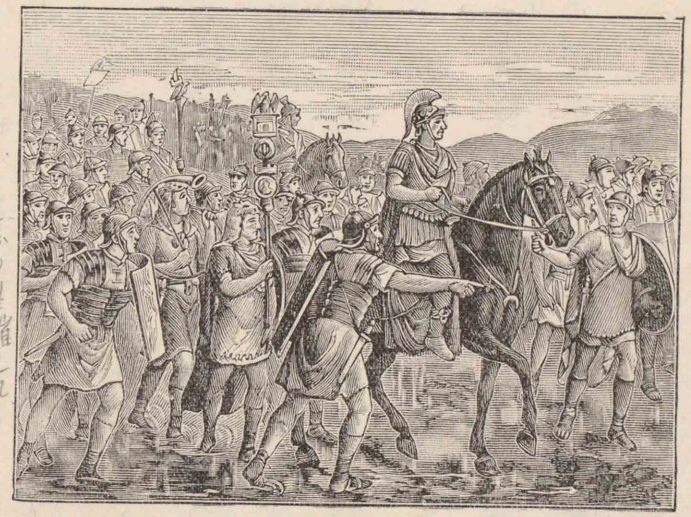
ルビコン河　上古ガリヤの地とローマ土地とを境したる領小河。アドリヤ海に注ぐ。今その位置は不明になつてゐるが、フイウミチノ河がこれに當るといはれてゐる。

一一　ケーザルの乾坤一擲　その二

ルビコン河はローマの北にあつて、內地と蠻族ゴールの地とを境する河である。さゝやかに流れる河ではあるが、この河には重大な意義があつた。卽ち元老院の許可を受けずしてこの河を渡る將軍は、國賊として取扱はれるのである。流石のケーザルも、この河に來て二途その何れを採るべきかに就いて迷つた。さうして從ひ來れる將卒を集めて最後の演說を試みた。彼はまづ、外征八年の間、將卒がよく困苦辛酸を共にして奮鬪せるの勞を謝し、さて一轉して、この度の不慮の事變に說きおよび、「微志いまだ酬いられずして、今元老院よりこの命令に接す。ケーザルまた何をか

言はん。たゞこの後は忠良なる諸友の援助を待つのみ」と結んで聲涙ともに降つた。

沈痛悲壯なるこの演說に感激した全軍の將士は、嗚咽流涕久しうして後、一齊に聲をあげて、「將軍の爲には一命何か惜まん。劍は折れ矢は盡くとも、將軍と共に最後まで戰はん」と誓つた。



ルビコンを渡るケーザル

ケーザルは厚く彼等を慰撫し、盛大なる宴を張つて之を休養せしめ、更に諸將を會して

今後の處置を凝議したのである。その席上に於て血氣にはやる諸將は「この儘ルビコンを渡つて急にローマを襲ふべし」と言ひ、思慮深き老將軍等は「一旦北に歸つて大兵をガリヤ族中に募り、堂々として雌雄を決するに如かず」と說き、衆議は夜に入つても容易に決するに到らなかつた。ケーザルは會議を中止した。さうして竊に衆を脫して馬に跨り、迷ふが如くルビコンの河岸に辿り來つて、爰に再び沈思默考に耽つたのである。

夜は更けた。四邊寂寥、聞ゆるものは唯蓼々たる河水の音のみである。あたりは暗い。目に入るものは滿天に閃めく星辰のみである。ケーザルは靜に馬を下りて橋の上に

アリミナム　今北イタリヤにあるリミノがこれである。城壁をめぐらした市。當時ローマ領土の入口にあつた。

立つた。さうして默然として流れる水の面を見つめた。

彼は再びローマには攻入るべからずと思つた。輕舉して一敗地に塗れんか、萬事休するの虞があると思つた。けれども靜に頭をあげて、河の彼方を眺めやれば、アリミナムの城塞は手にとるがごとく、星空に黑く浮出して見える。見よ見よ、あれこそはローマの城である。眼前指呼の間にローマを見ながら、これを侵略しないのは、寶の山に入つて手を空しうするの類である。進んで之を取るべし、一擊の下に之を奪ふべし。しかれども更にローマに進まんとする時の運命は如何に。かく考へて暫し默然たりし彼は、蹶然起つて最後の決心を固めた。「見よ。成敗は天にあり。か

の城は侵略せざるべからず。渡れ。賽は遂に投げられたり。」嗚呼、賽は遂に投げられたり。局面に現るゝは雨か嵐か。そは唯天のみの知る所である。かくして、その夜の中に全軍に進發の命が下つた。將卒一體鐵石の心を固め、歩武肅々一絲亂れず、遂にルビコンの河を渡つて驀地にアリミナムの城に向ひ、一戰にも及ばずして、一夜の中にその城を陷れたのである。

ケーザルが迅雷の如くルビコンを渡つてローマに進軍するとの報は、忽ちにして全國に擴がつていつた。さうして到る所に恐怖と混迷の狀が現れ出た。彼の武勳はかねて國内に喧傳せられてゐる。その兵を用ふるや疾風耳を蔽

ふに逞なしといはれ、その戰略を施すや、奇策縱横鬼神の如しと稱せられてゐる彼である。故に之を迎へる人々は皆色を失つて爲す所を知らなかつた。殊にその最も甚だしかつたのはローマ市民である。ポンペイウスは、ケーザルが元老院の命令に抗して攻來るべしとは思はなかつた。ましてや、かくの如く迅速であらうとは夢想だもしなかつたのである。その故に、ケーザルに對する軍備は十分整へて居なかつた。然るにケーザル進軍の報と共に、沿道都城陷落の報が、日夜頻々とローマ市に達したので、市民は今にも一大修羅場の現出せんことを恐れ、貴族はその財産を纏めて市外に逃れ、元老院は遂にポンペイウスを捨てるやうになつた。かくてポンペイウスはローマを脱出してギリシャに逃れ、ケーザルは難なくローマを占領することが出來たのである。

ポントス　黑海の東南岸にあつた小王國

けれども、ケーザルは更に乾坤一擲の大決戰を試みなければならなかつた。一旦ギリシャに逃れたポンペイウスは、大軍を彼の地に得て、報復のため再びローマに攻入つて、彼と最後の雌雄を決せんとするとの報に接したがためである。ポンペイウスと雖も、當時はローマ第一の將軍とされてゐたものである。彼は嘗て、地中海に横行して商旅を掠め艦船をおびやかす頑強不逞な海賊を征して威名をあげ、更に東方ポントス國を討つて小亞細亞地方を平定し、ロー

マ第一の將軍として嘆稱せられたものである。故にケーザルにとりては彼は尙侮り難き敵であつて、若しもこの一戰に敗衂の憂目を見るならば、彼は永世ローマより葬り去られる運命に遭遇しなければならぬのである。ケーザルには、こゝに再びその身命を賭して一大決戰をなすべき時期が到來したのである。

一二　ケーザルの乾坤一擲　その三

尙こゝに戰略上ケーザルにとつて最も痛歎すべき一つの事があつた。それは彼に少しの海軍力もなかつたといふことである。陸には連戰連勝の英雄も、海にはその鋭鋒を振ひ得べくもなかつた。殊にアドリア海一面には、最初からローマの海軍力を掌握せるポンペイウスが、逃ぐるに際して、その艦船を盡く徵發してギリシャに退き、隙間なきまでにその海岸を防備しておいたのである。ケーザルは遂に、退いて敵の來つて上陸するを待つか、又は之を放棄して國外に於ける反對黨の跳梁を默認するかの外、策の出づる所なきに到つた。かゝる境地にあつては、流石不敵のケーザルも、徒に憔悴の裡に日を送つたのである。けれどもケーザルは、荏苒として時日を遷延することを好まなかつた。又敵の上陸を待つて戰ふことは、深く自ら愧とする所であつた。まして國外であつても、敵黨の蹂躙に委かすことは

アドリヤ海　イタリヤと、ボスニヤ・ヘルツエゴビナ等の地の間にある海

到底忍ばれぬことであつた。彼は全イタリヤ半島の地に令を下して、二十隻餘の運送船を得た。かくして輕裝した兵士の半を之に乘りこませ、竊に敵の防備なき僻地に上陸したのである。乘船に臨んで彼は將士に向つて曰く、「汝等は輕裝して戰場に臨むべし。從僕・奴隷は從ふるを要せず。糧食兵器は携ふるの要なし。ギリシャに渡つて直に彼等を屠り、以て一切の必要品を供給せしめん」と、その意氣の盛なる以て見るべきである。

けれども上陸して戰を交ふるに當つて、彼等はかくの如く容易には敵を屠ることが出來なかつた。或時は糧食に苦しみ、或時は猛襲を受けて苦戰に陷り、遂に命を空しうせんとせることさへあつた。

テッサリヤ　ギリシャの北部に擴がつた豐饒な地

ゴンフィー　テッサリヤの市

さうして北方に退軍の止むなきに到つたのである。ケーザルは敗れて、北の方テッサリヤに逃げた。常勝將軍ケーザルも遂に敗れて、再び立つ能はざるに到るのではないか。ポンペイウスの追擊はいよいよ急である。ケーザルは益〻北に逃延びた。かくして彼の運命は益〻窮迫して行くのであつた。

辛うじて彼はゴンフィーの町に入つた。この地は物資が豊かで糧食の供給は潤澤であつたから、敗軍は始めて喜色を帶びて士氣が再び振ふに到つたのである。しかも一難去つて一難又來るで、この時既にポンペイウスはその大軍を率ゐて追來り、彼に些の休息をも與へなかつたのである。

ファルサルス　テッサリヤの中にあつた地

ケーザルは地の利を相して、ファルサルスの野に陣して敵を待つた。けれども數の上から見て、彼には到底勝算がなかつた。この時の兩軍の兵數を見ると、ポンペイウスは歩兵のみでも四萬五千を有してゐた上に、更に精鋭をすぐつた出沒自在な騎兵七千を有してゐたのである。この騎兵は、敵軍中最も重要視せられたものであつて、甲冑馬具の精巧なる、馬匹の駿足魁偉なる、進退行動の敏速なる、あらゆる點に於て頼とするに十分であつた。これに反してケーザルの軍は、歩兵と雖もその半數に滿たなかつた。騎兵は僅に一千を越えなかつた。のみならず將卒は、懸軍萬里、異鄕に遠く戰つて、大いに士氣の沮喪を來した時である。かるが故に彼は堂々たる對陣によつては、遂に勝算を見出すことが出來なかつた。その上惡夢と凶兆と奇現象とは、遂に彼を悲嘆の中に陷らしめた。彼は遂に全軍に向つて、戰はずして再び退き、援軍と合して戰ふべきか、この地でガリヤ以來の最後の一戰を試みるべきかに就いて問うた。然るに將士は皆「敵の挑戰に對して逃ぐるは卑怯なり。我等は千軍萬馬の間に馳驅して死するを恐れず。敵はよし大軍ならんとも、我等將卒が心を一にして戰はんに、勝敗何ぞ憂ふるに足らん」と。然り。勝敗何ぞ憂ふるに足らん。軍機は士氣の旺盛なるを尊ぶのである。百萬の大軍を擁しても、烏合の衆ならば何にならう。將卒心を一にして、等しく

必死の突撃を試みなば、戰運は必ず味方にあらう。流石に英雄ケーザルは戰機を知つてゐた。將士の言を聞いて勝算我にありとなし、遂に大聲疾呼して曰く、「よし。戰へ。必ず勝たん」と。かくして最後の戰陣を張つたのである。やがて戰機は熟した。ケーザルは敵の騎兵に備へんがために、六個隊の兵を後方に殘しおき、全軍をあげて敵に向つた。彼自ら陣頭に立つて長槍を振ひ、敵陣目がけて疾風の如く突入すれば、從ふ兵士も先を爭つて勇猛の氣激しく、縱横無盡に斬結んだ。兩軍の歩兵は、此處を先途の大激戰である。ポンペイウスの騎兵はこの時急に運動を開始して、ケーザルの右翼を猛襲した。これは彼にとつて致命的の打擊といはねばならぬ。彼は直に後衞六個隊の歩兵をこれに向はせた。歩兵と騎兵の戰は、接戰すれば歩兵の勝である。ケーザルの軍は鋭く敵軍に肉薄した。さうして各、長槍を捨て短劍を振つて、鯨波の聲勇しく敵騎の馬を驚かし、その馬脚を目蒐けて突擊した。馬は閃々なる劍光に脅かされ脚上の痛手に驚いて、騷擾の中に潰走し始めた。ケーザルはこの機を逸しなかつた。命令一下、全軍は喊聲雷の如く、天地を轟かして突擊を試み、閃光の如く斬進んだので、ポンペイウスの軍は意氣全く沮喪して、全軍總崩れとなつて敗走したのである。

全軍を賭し一國を擧げての戰爭は、實に天下分け目の戰で

ある。永久に並び立たざる兩雄が、各〻必勝を期して輸贏を決するのは、正に乾坤一擲の大戰でなくてはならない。ケーザルはその英雄的生涯を通じて、こゝに身命を賭した最高潮の一戰を行つた。さうして戰略の機微と軍機の向ふ所とを明察して、迅雷の如き用兵と鋼鐵の如き英氣とを以て殺到し、敵を混迷狼狽の極に達せしめたのである。彼の行く所は、燎原の火の如く止まる所を知らない。誠に彼は英雄と謂ふべきである。

（中川一男）

中川一男　東京高等師範學校教官

一三　上高地の靜境

上高地　日本アルプスの南部梓川の上流の高原。海拔五千尺

島々　長野縣松本市の西四里餘

徳本峠　島々から上高地に至る途中の峠

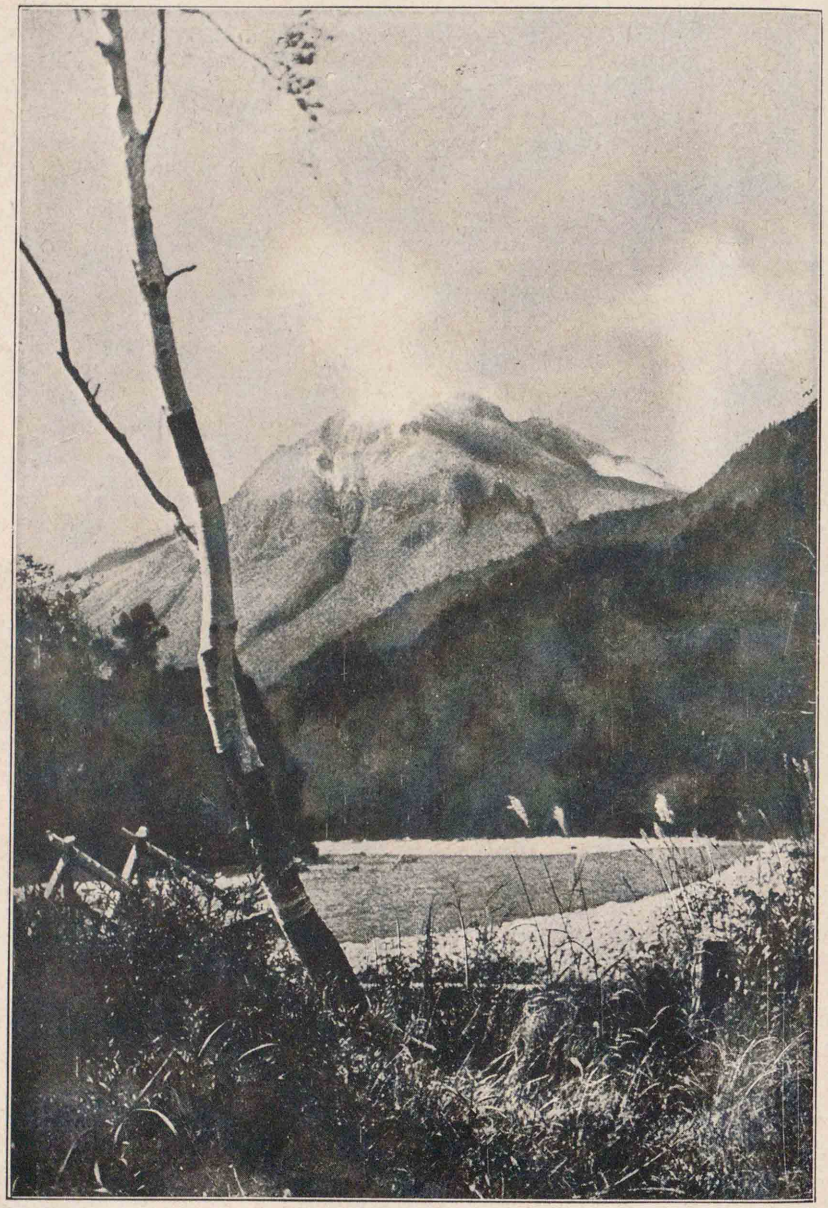
島々から四里の林道を登つて徳本峠の頂に出ると、白雪を頂いた穂高の秀麗な連嶺が俄然として現はれ、常念山脈の豪宕な姿が強い色彩で描かれてゐるのを見る。そして三里の上高地の高原は、整然とした木立の裝で全溪谷を埋めてゐる一方を、梓川の清流が穂高の裾について白くうねつてゐる。二十町餘も下つて上高地に下りきると、溪聲があちらこちらに聞えて、道は樅や落葉松や栂の淋しい林を分けていくのである。

穂高　上高地の北にある山。三峯よりなる

常念山脈　日本アルプスの一支脈で、上高地の東北に連る

穂高の氣高い姿と、落葉松や白樺のえもいはれない色彩と、清澄な梓川がその間をくゞつてゆつたりと流れる情趣とは、上高地峽谷の最も飽かぬ眺である。行手に燒岳の二筋三筋の寂しい噴煙を眺めながら、樹間を辿ること七八町で、

燒岳　上高地の西方にある火山



上高地より燒岳を望む

霞澤岳　上高地の東南。德本峠につゞく山

溫泉旅館の建物が現はれて來る。梓川の流はこゝでは一際ゆるやかに、向岸の柳の林が次第高に、白樺となり栂となり落葉松となつて、やがては秀麗な霞澤岳と聳えて清淨な景色を作つてゐる。その流るゝ水、川向ふの柳の林、漂ふ雲、それらを見るだけでも無限の情趣が味はれる。まして旅裝を宿に解いて、息もつきあへぬ程に變化するこの溪谷の自然の色彩と活動とを眺めるならば、わが心の忽ちに淨化されて行くのを感じるであらう。

朝の上高地を味はうとする者は、まだこの溪谷に朝日のささない五時頃、宿の欄干によつて梓川のほとりに眼を轉じなければならない。先づ眼に入るものは霞澤岳である。

河童橋
梓川にかゝる

秀麗な峰頭から滴り落つる緑の色は、流れて針葉樹や濶葉樹の林となり、ゆるやかにうねつて對岸の柳と白樺と落葉松のゆつたりとつゞく林となる。この林から川面にかけての一帯の薄靄は、いまかすかに搖り動いてゐる。と、見れば雄偉な燒岳は、その東の半面を薔薇色に染めてゐる。噴煙は今しも眠から醒めたかのやうに、靜な曉の空へと立昇るのである。

暫くすると德本峠から旭が昇つた。朝靄が溶けるにつれて、上高地一帯の溪谷が俄かに銀のやうに明るい光を漂はせて、梓川の川面がきら〳〵と光つて來る。しかし河童橋から德本峠へかけて、密林にとざされた約一里の間の冷た

い空氣は、まだ溫められずに、氷のやうな流がその底を山裾に添うて流れてゐる。　靄はあとなく消えて山膚の皺が殘りなく現はれた。　見渡すかぎりの溪谷は、綠に黃をまぜて、霞が連嶺の八合目あたりを隱した。　耳を澄ませば溪谷の曉は靜で、たゞ潺流の音が聞えるばかりである。

だん〳〵日があがる。　しかしこの溪谷には、かしましい蟬の聲や、いつも聞馴れてゐる鳥の聲はない。　この溪谷の朝夕を通じて最も多く聞くのは、鶯の聲と時鳥の聲である。中にも時鳥の聲は、人は何處に住んでも悲しい生活から逃れられないといふことを告げるかのやうに、この峽間にも啼いて行く。　繪を描く人やそゞろ歩きの人が歸つてしまつて、その足痕のみが淋しく殘つてゐる梓川の岸をさすらふ夕に、眞に斷腸の思あらしめるのはこの鳥の聲である。

畫、二階の欄干にもたれて、屋根の上に餌をあさる鶺鴒の姿を何心なく眺めてゐると、思ひがけぬ時鳥の聲の梓川の流聲に消えて行くのに、憂ひ心地のふと誘はれるのも折々である。

上高地の美は、雨によつて殊に發揮されるのである。　雨の上高地は、いままでの翠綠の溪谷をして、俄かに黃金の色どりに變ぜしめる。　雨の日欄干によつて、霞澤岳から梓川の岸の柳の林にかけて、この溪谷の物象がいかに移り變るかをつく〴〵と眺めよ。　一條々々の雨のけぢめが、平地より

は一層明瞭なこの溪谷の雨は、先づ煙のやうなしぶきを横になびかせる。梓川の岸の林は見るまに萠黄色がまさる。あたりの爽かな空氣は一層その度を増して來る。この時溢れる溫泉にとびこんで、窓から霞澤岳を眺めながら空想にふけるのも興味が多い。やがて夕暮近く雨が止むと、雲が盛に動いて霞澤の峰頭が時々雲間に立つ。が、見渡す溪谷の底には靄が滿ちて來る。ぱつと谷が明るくなつた。しかしそれは靄が晴れたのではない、夕日が靄にうつゝたのだ。この時のこの溪谷を充たす色彩の美しさは、平地の朝夕のみを知る人々にどうして想像できよう。湧きかへる溪谷全部の卵黄色――これがその靄の色をあらはす極

めて不十分な言葉である。

上高地の急激な雷雨に經驗のある人は、その光景を更に印象的なものの中に數へる。その起るや極めて咄嗟である。忽ちにして霞澤岳の峰頭が濛々と煙ると、はや殷々たる雷聲が全溪谷を震駭する。火柱が山の頂から林にかけて立つ。無數の雨脚が雲を貫いて一齊に溪聲の鳴をとゞめる。しかし暫くして明るさが増して、雲がきれ〴〵になつて日光が洩れて來る。すつかり晴上つた後までも、二片三片の雲が、柳の林に歸途を忘れてさまようてゐる。そして雨の後の林の色は萠黄にゆらいで、今にも樂の音となつてとけ出しさうである。

槍ケ岳　穂高岳の北に立つ嶮山

追分　追分節

松前　松前節

日中の上高地は、珍らしい溫泉場の光景を呈する。昨夕迎へた幾十の人々、それらは何處へ行つたであらうか。或人は湖水のほとりへ、或人は穂高の眺を貪らうとして河童橋の附近へ、或人は槍ケ岳へ、そして或人は梓川の岸に竿を携へて往つてしまふ。この時はこの溫泉の最も閑暇な時である。女中は洗濯をする。男は掃除をする。殘つた二三の客は緣側に日なたぼつこをしながら、梓川の流のまにまに心を泛べる。美しい鄙歌の聞えるのは女中のすさびである。追分や、松前や、幾百年の人の愁情もこの溪谷の清寂な自然の姿にふれて、一層哀愁の氣を帶びてゐる。

夕暮、宿の前にたゞずんでゐると、時鳥の聲が頻にうしろの

林をさまようてゐる。宿の後から流れて來て、浴槽の傍で淀んでゐる流に、岩魚を釣る客が二三人糸を垂れてゐる。

德本峠の方を見ると、柳と栂との林から人夫がやつて來る。洋服の人が來る。若い女の學生が來る。外國人が來る。そしてこの溪谷へ入るどの人もが抱くところの、希望に嬉嬉とした顏色を泛べて來る。これらの人々が着くと、宿の玄關は急に忙しくなる。草履の音が廊下にやかましい。浴槽に話聲が高まる。

月夜の上高地は、想像しただけでも美しい。月の上らぬ前に先づ霞澤一帶の峰が明るみを帶びて來る。暫くすると白い太い光が、白銀の矢のやうに斜に谷をこえて穂高の連

峰にそゝぎかゝる。それから漸く月が山の端を出る。その月は、夏でありながら平地で見る十月の色である。谷の底の流も林も薄靄に包まれて、美しい光の衣をかける。かういふ夜の物靜けさ。雨戸を引かない部屋には秋かと思ふ月の光がさしこんで、唯隣室の鼾聲とせゝらぎの音だけが枕元に落ちる。この時、人は、自分といふもののさゝやきが、今まで氣づかなかつた姿で現はれて來るのを感じる。月の夜の朝、私が相變らず欄干にもたれてゐると、隣室のフランス人が、

「昨夜は誠に結構な月でした。」

と日本語で話しかけた事があつた。

燕村　谷口氏又與謝氏。天明俳壇の巨人

曉臺　久村氏。尾州の俳人

闌更　京都の俳人。醫を業とした

十月になると、四圍の峰巒に白い斑雪が見え初め、穂高から梓川にかけて、身ぶるひするやうな白く冴えきつた雪溪が出來る。その時自然は上高地を更に〳〵淨化させて、人間をよそに、その壯大なる美觀をほしいまゝにすることであらう。

（日本アルプスと秩父巡禮の文による）

一四　天明調

春

春の海日ねもすのたり〳〵かな　燕村

日暮れたり三井寺くだる春の人　曉臺

川船やひばり鳴立つみぎひだり　闌更

蓼太　大島氏。雪中庵第三世の俳人

一茶　信濃の俳人。俳諧寺と號す

也有　横井氏。尾張の人。俳文の大家

移竹　田河氏。京都の俳人

夏

五月雨やある夜ひそかに松の月　蓼太

涼しさや鐘をはなるゝ鐘の音　燕村

雨乞や火影に動く雲の峰　闌更

秋

有明や淺間の霧が膳を這ふ　一茶

曉の寢姿さむし九月蚊帳　曉臺

江渺々釣のいと吹く秋の風　燕村

冬

武藏野に露一つなし冬の月　也有

冬枯や木の葉しづまる川の底　移竹

昨晩　嘉永六年六月四日

四つ時　亥の時、今の午後十時

七つ時　寅の時、今の午前四時

松輪　浦賀水道の西側

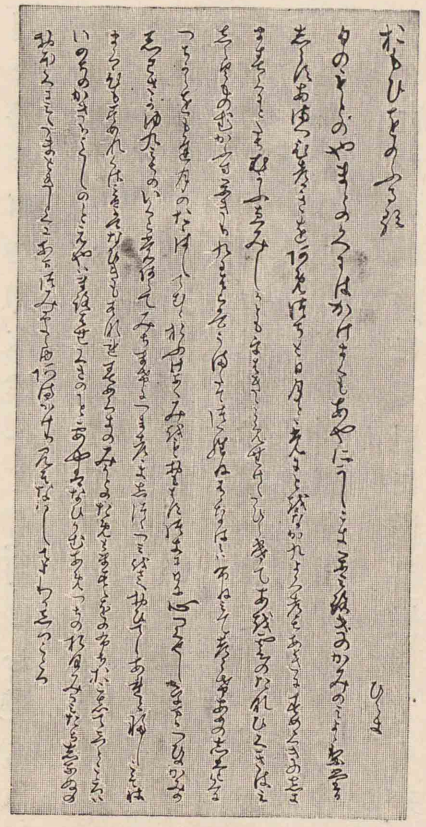
ともし火を見れば風あり夜の雪　蓼太

一五　母に上る

日々暑き事に御座候へども、何のお變も入らせられず候か。私事あまり〳〵達者にて、昨晩、四つ時も過ぎ、浦賀まで着いたし候まゝ、御安心願上候。いま早く起き候うて、山に登り、渡來の船ども一見致候處、かねて聞きおよび候とほり、大そうなるものに御座候。都合四艘の處、二艘は蒸氣船と申すものにて、火の力にて風に逆ひ候うても、差支なく走り候船に御座候。一昨日七つ時前の頃、松輪と申す邊に、帆影見ゆるなど沙汰し候うち、矢の如くに、港内に入來り候由。今朝

見候へば、陸より十七八町も隔り候處に、一艘これあり候。これは、コルベットと申す船にて、大砲、左右に二十四挺、艫に二挺、都合二十六挺備へ候船に御座候。その並びに、六七町隔てて、蒸氣船、又六七町離れて、初の如き船これあり、又六七町隔てて蒸氣船、又六七町離れて、初の如き船これあり候。蒸氣船は、いづれも、殊に大きく御座候樣見え申候。とても、かれと爭ふには、私などのかねて申居候

コルベット　小軍艦の一種　コルベット型ともいふ



佐久間象山筆

奉行　浦賀奉行

とほり、こなたにも大船をかれと同樣に拵へ、大砲をも同じく澤山に作り候上ならでは、出來申さず候。この度も大いに見侮り候うて、小船十五六艘おろし、一艘に十人ばかり乘り候もこれあり、五六人なるもこれあり、港口、處々乘りある き、繩を下げて海の深淺を測り、剩へ浦賀の燈明臺と申す邊に上陸致し、悠々見物致候體、傍若無人の樣子と申すことに御座候。然るを、奉行はじめ、怖れられ候か、與力同心もこはがり候か、それが上の御趣意に候か、たれ一人咎め候者もなく、唯見ぬふりをして置き候との事。さて〳〵遺憾この上なき事に御座候。一昨日四艘參り候が、なほあと四艘參り候はむと承り候。まづ至つて穩かなる取扱に候へば、この

度は何事もこれあるまじく候。公邊の御挨拶も、早速には相濟み申すまじく、「いづれ盆前に片づき候はば宜し」など、この土地の者も申居候。私も、また出で候とも、この度は一兩日中に罷り歸り候心得に御座候。さりながら、今少し穿鑿仕りたき事これあり候間、大凡わかり候事ども認め御屋敷へ差出し候ため、附人の内一人差戻し候まゝ、大略の事御聞かせ申上候。めでたくかしこ。

（佐久間啓―象山全集）

御屋敷　信濃松代藩主をいふ。當時の藩主は眞田幸貫

佐久間啓　號は象山。信州松代の藩士。維新の先覺者。元治元年刺客に殺された五十四歳

一六　初期のナポレオン

一七九六年、ナポレオンはイタリヤ遠征軍の總司令官に任命された。その時彼は二十七歳であつた。

彼のイタリヤ遠征は、モンタノットの戰を振出しに、カンポ、フォルミオの條約に至るまで、ロヂ・アルコーレ・リヴォリなどの大小十八會戰を經たが、いづれも彼の光輝を增すための勝戰であつた。

ナポレオン

モンタノット　イタリヤ、セノアの西方にある地

カンポ、フォルミオ條約　イタリヤの東北隅の國境にある地で、墺國との平和條約は、この一年半後に締結された

ロヂ　イタリヤ北部のロンバルヂアの一地名

アルコーレ　ヴェニスの南西、ポー河のほとり

リヴォリ　ロンバルヂヤの中央ガルダ湖のほとり

モンタノットの戰の翌朝の事である。あちらこちらから集められた雜駁なフランス軍隊が一つになつて、日の輝く高原をボルミ

王朝時代（ブルボン王朝の時代）

ワーテルローの戰（ベルギーの地名。戰は一八一五年六月十八日に行はれた）

ダ河に沿うて進軍した。その時に、王朝時代からの老將軍の胸にも、新米の兵卒の頭にも、一樣にきらめいた一つの暗示があつた。それは彼等の頭上に、一つの偉大なる新精神が支配しかけてゐるといふことである。この信念は日を經るに從つて、軍隊と國民とを益〻強く彼の身邊にひきつけた。そして一生變らない心服と、水火をも辭さない忠義とが、彼の圖り知れない野心を遺憾なく遂行せしめるに役立つた。彼のこの磁氣的魔力は、「どこへ引きずられて行かうと、ナポレオンが我等の上に立つてゐるうちは安心だ。」といふ盲目的の崇拜にまでフランス國民を驅つた。そしてワーテルローの戰に至るまで、彼は戰勝か死かをその國民に

強ひる術を解してゐたのである。

鋭利な理智、くろがねの意志、無上の自信、超人的勢力――それ等にも增してナポレオンの天才を特色づけたものは、彼のこの人格的魔力であつた。「天才」は解剖を無視し、記述を超越するが、しかしその不可思議な力は、直に近づくものの上に強くあらはれる。

ナポレオンの周圍には、帝王と、猛將と、奸臣と、その外あらゆる種類のものが集つてゐたが、彼の威容は、その中に立つて嶄然頭角をぬいて居た。彼等の崇拜と、彼等の憎みと、彼等の不平と、彼等の阿諛と、彼等の忠實と、彼等の陰謀とが、彼の身邊にさま〴〵な光と影とを投げあつて居たが、彼から出

る光はそれ等のものをすべて打消した。そして千萬の人の運命が、彼の思ふ方向に導かれた。彼の理想は彼自身の外に出でなかつたが、しかも彼の強い人格そのものが、殆ど最高の理想かの如く諸人には映じた。かのロシヤ遠征の際などは、一日戰へば、それだけフランスの損失であり、且人命の罪惡的消費であるといふことが、明かに各人の理智には分つてゐながら、一巨人の魔手に把まれた弱い人間たちには、それをどうすることも出來なかつた。日となく夜となく彼等は、たゞ戰ひに戰つた。しかも勇敢に、忠實に——最後まで。

ロシヤ遠征
西紀一八一二年

ナポレオンは、一見して人の性能を看破する鋭い眼識を有

してゐた。一小隊の士官がその部下を知悉してゐる以上に、彼は全軍に通じてゐた。そして全軍の將士が、自分が彼に知られてゐるといふことを知つてゐた。誰々は今どこに居るかといふ事、誰々は今何をしてゐるかといふ事、誰は何處で戰つて如何なる傷をうけ、誰はどこでどんな功績を擧げたかといふ事を彼が知り、彼が知つてゐるといふことを彼等が知つてゐた。幾戰場の間に幾萬の將卒が續々と斃れて、新しい者が、これに代つた。しかし彼の知識と彼等の信頼とは、より濃厚に改まつて行つた。彼の口から出る命令の中には、自分たちの聯隊の名が呼ばれるだけでも、彼等には無上の光榮であつた。彼の唇邊に洩れる一つの微

笑、輕い承認のしるし、一語、一禮が、よく彼等の身命を捧げしめるに足りた。

「イタリヤ遠征中の一挿話に、次のやうなのがある。一大戰の前夕、ナポレオンがある聯隊の前を通りかゝると、一人の兵卒が、隊伍の中から進み出して彼に聲をかけた。

「市民なる將軍よ。私は明日、あなたがどんな方法で敵を擊つかを知つてゐます」。

かういつて彼は、ナポレオンの胸中に祕した戰略を、手にとる如く描き出した。

「默れ、馬鹿者め」。

彼は急いでそれを制止した。

ランヌ　ナポレオンの元帥、オーストリヤのアスペルンの戰に傷いて死す（1792—1809）

オージュロオ　ナポレオンの元帥（1757—1816）

スタインゲル　ナポレオンの元帥

セント、ヘレナ　アフリカの西、太西洋中の一孤島

デザイ　マレンゴに戰死したナポレオンの將（1768—1800）

マッサナ　ナポレオンの元帥、エスリンゲン侯（1758—1817）

戰のすんだ後で、ナポレオンはその聯隊へ使をたてて件の男を捜させたが、惜しい哉、かの偉才は一兵卒の服のまゝで斃れてゐた。彼は未來の一元帥を失つたのである。

ちやうどそれと同じやうに、將來ナポレオンのもとに偉勳を樹てた將軍たちは、みな低い列伍の間から拾ひ上げられたものである。ランヌ・オージュロオ・スタインゲルなどが、イタリヤ遠征中から頭を擡げ出した。セント、ヘレナの最期に、ナポレオンの回想はイタリヤの高原を驅けまはつてゐたと見える。「スタインゲル！デザイ！マッサナ！」。かう彼は將軍等の名を呼びつゞけた。

ナポレオンの將軍中には勇敢な人物が多かつた。いつも

長身兵（グレナヂール）を率ゐて皇帝の傍に居たオーヂュロオは、常に傷つ
いてゐた。彼は一生に二十三箇所の傷を負つた。この猛
將もナポレオンの前へ出ると、わけもなく怖（おぢ）けた。
ランヌは勇將中の勇將であつた。彼はイタリヤ遠征の第
一戰からナポレオンに知られ、最後まで皇帝を「さま」と呼
んで居た親しい間柄であつた。彼はやはり何時も傷つい
てゐた。「彈丸もランヌの骨はよける。」と噂されたほどであ
る。シリアの戰に彼は頭部を打たれて倒れたので、とても
助からぬと思はれたが、彈丸は彼の頭蓋骨を一廻りして皮
膚に止つてゐたといふ。それから間もなく彼は脚を擊た
れたが、今度は彈丸の方でいびつになつて、脛のふくらみの

シリア　西部アジヤの地中海沿岸の地

一八〇九年　文化六年、將軍徳川家齊の時

アスペルン　オーストリヤの村

處に止まつた。しかし一八〇九年に、とう〳〵彼はアスペ
ルンで大砲の犧牲となつた。
このイタリヤ戰爭の時ぐらゐ、著しい對照を現はしたもの
はなかつた。オーストリヤ軍は整然たる隊伍を組み、兵士
はみな白の制服に身を固めてゐた。これに反して、フラン
ス軍は雜駁な寄合で、帽子を被らない者もあれば、破れた靴
を穿いた者もあつた。前者は老將揃で、後者は二十七歳の
司令官を先頭に皆同じ年輩の將校の寄合であつた。前者
の古典的戰術に對して、後者には獨創的な新戰術があつた。
フランス軍は殆どお祭氣分で敵を薙いで行つた。彈丸は
やはり堅かつた、劍は尖つてゐた、戰爭は生死の重大事であ

つた、それにも拘はらず、フランス軍はそれを忘れたかの如くに戯れた。

ある時ナポレオンは、參謀將校の幾人かと僅かの兵隊とをつれて、ロナトと呼ぶ小さな町にさしかゝると、急にオーストリヤの大軍に包圍された。敵將は使を以て降伏を勸告して來た。軍使は當時の習慣に從つて、覆面のまゝナポレオンの面前へ伴なはれたが、彼は殊更にその幕僚等に威容を整へて堵列させて置いた。で、軍使の眼かくしが取れるや否や、ナポレオンは大聲に彼を叱りつけた。

「すぐお前の隊長の所へ歸れ。そして降伏まで八分間の餘裕を與へるからと告げろ。おまへたちは現在フランス軍の眞中にゐるのだ。既定の時刻が過ぎたら全く望みがないものと思へ」。

軍使は慌てて引返した。敵將は驚愕のあまり、二千の兵士と四門の大砲を以て降伏した。

かうして一年半後には、カンポ、フォルミオの條約は結ばれた。彼は殊更に老外交家の度膽を拔く必要から、談判の席上にあつた、高價の支那燒の茶器を床へ投げつけた。

「おれはかうしてオーストリヤを擊つのだ」。

と言放つた彼は、さつさと部屋を出て行かうとした。先方の使節等は慌てて彼を引止めた。そして條約は彼の思ふ通りに、咄嗟に締結されたのである。

彼はイタリヤから、澤山の掠奪品を持つて凱旋した。その中には有名な美術品が多くあつた。

ナポレオンは、國民歡呼の間にパリへ歸つた。彼の名は世界的に喧傳された。市民は彼の爲にいろ〳〵の催をした。外務大臣タレーランの夜會が最も贅澤のものであつた。畫家ダビットが彼の肖像を描き、音樂家グラッシニが彼の爲に謳つた。

（中澤臨川―ナポレオンの人格と運命）

タレーラン　フランスの政治家（1754―1838）

中澤臨川　工學士。思想評論家

ルイ十四世　英雄的の性質を持つたフランス國王（1633―1717）

一七　ルーヴル美術館

ルーヴル美術館はルイ十四世の六宮殿の一で、王はこの宮に歐洲の美術を蒐集して天下に誇つてゐたのであるが、革命時代になつて、これを改めて美術館となし、佛國中の宮殿・寺院の寶物を引攫つて來て此處に集めた。その後へ、ナポレオンが出て、歐洲を蹂躙した序に、イタリヤ・ドイツ・オランダなどから、どし〳〵美術品を奪つて來て、戰利品と稱してこのルーヴルに飾り付け、おまけに「ナポレオン美術館」とまで命名した。

ラファエル筆

その時のルーヴルはパリの美術館ではなくして、實に世界の美術庫たる觀があつた。ナポレオン流竄後、かの戰

利品は多くその本國へ還つたが、猶ルーヴルに殘された物も尠からず、加ふるに美術國のフランスは、この美術館の富を增殖するに勉めてゐるし、十九世紀の間に大家名匠も多く輩出して、その作品を此處に留めてゐるので、ルーヴルは今以て歐洲、否世界に冠たる美術館と稱して差支ない。ルーヴルを見ずしては未だ歐洲の美術を語ることは出來ない事になつてゐる。余は唯僅の時間を以て、其の繪畫部と古代彫刻

筆ロリム

ラファエル
イタリヤの畫家
(1483—1520)

レオナルド、ダ、ヴィンチ
イタリヤの畫家
(1452—1515)

ムリロ
イスパニヤの畫家
(1618—1682)

レイノルヅ
イギリスの肖像畫家
(1728—1792)

部とを見ただけであつたが、館内をすた〳〵早足で歩く中にも、所謂「走りながらにも讀むべき」著大な名畫彫刻が左右に配る眼の中に映じ來つたのである。畫聖ラファエルの大作が何枚もあるのには驚いた。「顏被(ヴェール)を取る聖母」など神々しいものや、「天使ミカエルの惡魔退治」の壯烈なものなどを見た。レオナルド、ダ、ヴィンチの稀な宗教畫もあれば、ムリロの「聖母昇天」もある。英國畫は乏しいが、レイノルヅの小兒畫は傑作と稱すべき價値を有し

筆ズールグ

てゐる。グルーズの少女畫も數々あるが、中にも乳賣の少女は、豫てより憧憬してゐた原物に接したのであるから嬉しかつた。ミレーの「落穗拾ひ」は大幅ならずと雖も、一管の筆能く農民疾苦の狀を現してゐる。ルーベンズの大作十八枚を藏めたルーベンズ室が、壯麗な建築を以てこの色彩燦然たる刷毛の跡を珍藏してゐるのは、美術崇拜の意を盡したものと見た。全館の藏畫三千枚、それが一々見て居られたものでもなければ、覺えてゐられるものでもない。古代彫刻部は何れもギリシャ・ローマの名作遺品を蒐集したものであるが、素通りの見物だから、どれがよかつたか少しも記憶に存して居ないが、唯一つ暫く足を停めて眺め入り、そして長く忘れられないのはミロのヴィナスであつた。ギリシャのミロ島から發掘したと云ふ兩腕のないヴィナスの石像、その氣品の高いこと、ギリシャではきつと名作であつたのに相違ない。この後余はフロレンスでメディチのヴィナスも見たし、ローマの政廳のヴィナスも見たし、その他多くのヴィナスの石像を見たけれども、何れもこのミロのヴィナスの莊嚴端麗にして、眞に神性の美を現し、女性美の理想を發揮したものに

ミレー筆

グルーズ　イギリスの考古學者で畫家（1728—1792）

ミレー　フランスの畫家（1892—1896）

ルーベンズ　ベルギーの畫家（1577—1640）

ミロ　ギリシヤのイージヤン海にある島

ヴイナス　美の女神

フロレンス　イタリヤ北部の都市

メディチ　イタリヤの有名な家門。この一門からは著名な政治家を多く出した

及ばざること遠しであると感じた。（櫻井鷗村―歐洲見物）

櫻井鷗村　名は彥一郎。英學者

一八　杉田壹岐

寛永の頃、越前故伊豫守殿の家老に杉田壹岐といふものあり。もとは足輕なりしが、その身の材をもて微賤より登庸せられて、厚祿を受け、國老に列しけり。壹岐性忠亮にして骨鯁なり。常に顏を犯して直言し、君の過を匡救することを忘れず。

伊豫守　松平忠直。德川秀康の長子

或時、伊豫守殿在國にて、鷹狩し、晡時に及んで歸城あり。家老どもいづれも出で迎へしに、伊豫守殿ことのほか氣色宜しく、「今日若者どもの働、いつにすぐれて見えつ。あれならば萬一の事ありて出陣すとも、上の御用に立つべしと覺ゆるぞかし。その方ども承りてよろこび候へ」とありしかば、家老どもいづれも「御家のため何よりめでたき御事にて候」といひけり。

この時、壹岐は末座にありけるが、獨り默々として居たりしを、「何とか云ふ」と暫く見合せられしが、こらへ兼ねられ、「壹岐は何と思ふ」と仰ありしに、壹岐「只今の御意承り候に、憚りながら歎かはしき御事に存じ候。當時、士ども御鷹狩の御供に出で候とては、先にて御手討になり候はむも計り難く候とて、妻子と暇乞して立別れ候と承り候。かやうに上を疎み候うて思ひ付き奉らず候うては、萬一の時御用に立つべ

何某
伊藤玄蕃

しとは存ぜず候。それを御存じなく、賴もしく思召さるとの御意こそ愚なる御事にて候へ。」といひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じけり。

何某とかや云ひしもの、伊豫守殿の刀持ちて側に居たりしが、壹岐に「座を立ち候へと云ひしを、壹岐聞きて、その人をはたと睨み、「いづれもは御鷹野の御供して、鹿猿を逐うて駈廻るを御奉公とす。この壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な。」とて、そのまゝ脇差を拔いて後へ投げすて、伊豫守殿の側に進み寄り、「只御手討にあそばされ下され候へ。空しくながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はむよりは、只今御手にかゝり候はむ方遙にまさり候ひなんず。」といひて、頸を延べて平伏しけるを見給ひて、何ともいはで奥へ入られけり。

その跡にて、外の家老ども壹岐に向ひて、「御爲を思ひて申されしは尤にて候へども、折もあるべきことにて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸ありしに、御氣先を折られ候ことは、遠慮もあるべきことにこそ。」といひしを、壹岐「君へ諫を申上候に、御機嫌を考へ候うては、よき折とてはなきものにて候。今日はよき序とこそ存じ候へ。その上、某事は御取立のものにて候へば、各〻とはわけの違ひたるものにて候。御手討に逢ひ候うてもその分の事にて候。」と云ひければ、家老ども皆々感じ合ひけり。

やがて家に歸りて、切腹の用意して君命の下るを待ちけるが、日頃糟糠の妻のありけるに向ひて、「御身に言ひおく事、唯一つ侍り。御身は女の身なれば、直ちに御恩を受けたるにてはなけれども、わが御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、いま歴々の妻として大勢の所從に圍繞せらるゝは、限なき御恩にあらずや。然ればわれ生害仰せ付けらるゝ跡にても、只朝夕今まで御恩のありがたかりしことを忘れざれ。假にも上を怨み奉る心あるべからず。若し女心にて、我が身の物うきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を言葉の末にも露おきなば、黄泉の下までも深く怨と思ふべし。」とぞいひける。

室鳩巣　名は直清。幕府の儒官。享保十九年歿、七十七歳

蒲生君平　下野の人、寛政三奇士の一人。文化七年歿、四十六歳。或は四十七歳ともいふ

さて今か〳〵と待ちけるに、夜ふくる程に人來て門を叩き、「召あるまゝ登城すべし。」となり。扨こそと思ひて登城しけるに、直ちに寢所へ召入れ、「その方が晝言ひし事心にかゝりて寢られぬ間、夜陰なれども呼びつるなり。我があやまりたる事はとかく言ふに及ばず、その方が志を深く感じ思うて滿足するぞ。」との事にて、直ちに腰の物を賜ひしかば、壹岐は思ひも寄らぬ事として、覺えず落涙に咽びつゝ、賜を拜して罷り出でけりとぞ。

（室鳩巣―駿臺雜話）

一九　蒲生君平と小澤蘆庵

蒲生君平、山陵探求の爲に京に赴きし時、かの地に絶えて知

小澤蘆庵　尾張の人、國學者。享和元年歿、七十九歳

る人なかりければ、便らむ方もなくして困じ果てたり。時に小澤蘆庵は古學を好みて萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりと聞きしかば、その助を借らむとて、やがて蘆庵が宿所をおとなふに、そが僕出で迎へて、「いづこより」と問ふ。佯りて、「某は下野なる宇都宮の蒲生伊三郎といふ者なり。琴を好み候へども、田舍にはよき師なし。主人の翁は琴の妙手にておはする由きゝ傳へて、はるゞゝと尋ね來つるにて候」といふ。僕は奥に赴きて、これを告げたるに、蘆庵は聲を高くして、「あな無益にも訪はるゝものかな」。汝出でて、しか答へよ。『主人は久しう客を辭し交を絶ちたれば、都のうちだにも親しうせるものは稀なり。琴は若かりし

時搔鳴らしたりけるを、遠近の人に知られて、かれに聽かせよ、これに教へよといはるゝがうるさければ、近頃うち擯きて薪に代へたり。かゝれば所望に從ふべくもあらず。他に求め給へ。』といへ。」といふ。

蒲生君平

君平は僕が報ずるをも待たず、「翁の御答はこゝにもつばらに洩れ聞えたり。某なほ一言あり。願はくは枉げて聞きたまへ。われは實は儒なり。しかじかの志願ありて都に上りつれども、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬとはかね

て傳へ聞きしものから、いひよる由のなきまゝに、琴を學ばむとて來つとはいひしなり。こは長者を欺くに似たれども、その虚言は已むことを得ざるより出でたるなり。今一度わどのを勞せむ。この由取次ぎ給へ。」といふ。蘆庵もこれを洩れ聞きて、「さりとは思ひがけざりき。そは珍しき客人なり。對面せずば悔しきこともあらむ。こなたへと申せ。」とて、やがて面を會はせけり。君平深く歡びて、事の趣つばらに語り出づるに、蘆庵ひたすら感歎して、「足下は得がたき學士な

長者
徳の高ク人
年齢高
富限者

小澤蘆庵

萬葉集

子二つの頃
午前一時頃

り。さる志ならむには、わが庵に杖を留めて、こゝらあたりの陵を靜に探求し給へ。」とて、また他事もなくもてなしけり。これより君平は日毎に陵を訪ねめぐるに、ともすれば日暮れて歸るを、主人はいつもみづから風呂を焚きて、入浴せさするを例とせり。君平その心づかひを心苦しとて辭みたれど、「これらの事は、ひたすらに客を愛するのみならず、足下の如き國の爲に力を盡す人の疲勞を、聊かなりともうち慰めむの心のみ。必ず辭み給ふな。」とて聞入れず。かゝりし程に、君平はある夜更闌けて子二つの頃歸れるに、蘆庵はいまだいねず、例の如く入浴せさせ、飯をすゝめ、さていふやう、「われ足下を宿せる日より、蔬菜の外に物もなく、させるもて

なしをばせざれども、老僕は憩はせむとて手づから風呂をさへ焚くを思ひ斟み給はずや。陵を訪ね巡ればとて、今までは用なからむに、道草食うてか、老人に物を思はせ給ふこと心得がたし。」と呟く。君平聞きて容を改め、翁のうらみ理なり。わが非をかざるにあらねども、こよひかく更たけたるはいさゝか故あり。懺悔のため笑に供へむ。今日は某の天皇の陵を訪ねたりしに、日暮るゝまでたづねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて年頃のうらみ心頭に起りて堪へられず、墓に向つて罵るやう、

等持院　山城國葛野郡衣笠山の南麓に在る寺

『梟臣尊氏、靈あらば今いふことをたしかに聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り、逆に守り、毒を後

世に流しゝより二百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もためにに燒失せ、王室もこれによりて衰へ、歴代帝王の山陵すらも跡なくなりて、我等にさへ飽くまで物を思はするは皆これ汝が罪なり。天罰思ひ知るべし。』とて、杖をもて石塔を思ふが儘に打敲きぬ。かくて寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道の邊の酒屋に立寄り、怒に任せて飲みし程に、六七合を盡したりき。さて酒屋をば出でしかど、醉ひて足も定まらず。この儘にて歸らば必ず翁に叱られむ。半ば醒まして行かむと株に尻をかけしより、うまいやしけむ、驚き覺むれば、はや更闌けたり。と語るに、蘆庵は呵々とうち笑ひ、「さても世には似たる馬鹿もあるものかな。我も去にし年、

或日靈山（リヤウセン）の邊に逍遙（エウ）して、長嘯子の墓所を過ぎし時、ゆきもえやらずにらまへて、『長嘯子不滅の罪あり。わぬし自らこれを知るか。わぬしは豊太閤の外族として、位高く采地も廣かるに、心さま武士に似ず。伏見の籠城に、敵の旗色に鬼胎を懷きて、鳥居元忠等を棄殺にし、かつ事平ぎてのち罪を蒙り、纔に命を助けられしを幸にして恥を知らず。心にもあらぬ世捨人顔して、えせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調のわろくなりて、今に至るまで直らぬはこれ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならむ。』と罵りながら杖を擧げて墓を毆ちたることありけり。こはよく似たるにあらずや。と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹を抱へたり。

靈山　鷲尾に同じ。山城國洛東にある

長嘯子　木下氏。國學者

伏見の籠城　後陽成天皇慶長五年（一六〇）

鳥居元忠　三河の人。德川の忠臣

二〇　西郷隆盛に與ふる書

（瀧澤馬琴―兎園小說）

山縣有朋頓首再拜、謹んで書を西郷隆盛君の幕下に呈す。

有朋、君と相識ること、に年あり。君の心事を知る、また甚だ深し。さきに君の故山に歸養せしより、久しく其の謦咳に接することを得ざりしかど、舊雨の感豈一日も有朋の懷に往來せざらんや。はからざりき、一旦滄桑の變にあひてこに君と旗鼓の間に相見ゆるに至らんとは。君が歸鄉の後、世の鹿兒島縣士族の暴狀を議するもの、皆いはく、「西鄉實に其の巨魁たり、謀主たりと。然れども、有朋はひとりこれ

瀧澤馬琴　名は解。江戸時代の小說家。嘉永元年歿。八十二歳

舊雨の感　雨は友に通ず。舊友を懷かしむ感

を斥けて然らずとなせり。しかして今かくの如し。嗚呼また何をかいはん。

然れどもひそかに思ふに、事のこゝに至れるは蓋し勢のやむを得ざるに出でたるものにて、君の素志にてはあらざりしならん。若し君にして初めより眞に異圖を懷きしならば、何ぞかゝる名なき軍を、かゝる機を失へる時に起さん。

佐賀の賊　明治七年二月江藤新平等の反

熊本　明治九年十月神風連の亂

山口　明治九年十月萩の前原一誠の亂

薩軍の今公布するところを見るに、罪を一二の官吏に問はんとするに過ぎず。これ果して、擧兵の名を得たりといふべきか。佐賀の賊まづ誅せられ、熊本・山口の叛徒ついで敗れ、今や天下の士民やうやく其の自省の志を立てんとす。しかして薩軍突如として茲に兵を擧ぐ。これ果して擧兵

の機を得たりといふべきか。君の明識なる、豈これを知らざることあらんや。

説者またいはく、「天下不良の徒は、西郷の山林に韜晦せしを奇貨とし、これによりて、功名を萬一に僥倖せんとする念を懷き、その辭を巧にして、ひたすら朝廷の政務を讒誣し、西郷に説くに、君出でずんば蒼生を如何にせん。君にして義兵を擧げなば、天下靡然としてこれに向はんとの旨を以てせしならん。西郷の卓識なる、その讒誣たるを洞察するに難からざりしなるべしと雖も、その浸潤の致す所、實に衆口金を爍かす勢ありて、知らず識らず遂に事を擧ぐるに至りしならん」と。聞く者皆然りとす。然れども、有朋ひとり之を

斥けて然らずとなす。如何となれば、もし君にして、まことにその志ありしならば、單騎輦下に來り、從容として利害のあるところを上言するに於て、何の妨げもあらざるべければなり。

思ふに君が多年育成せし壯士輩は、はじめより、時勢の眞相をも知り、人倫の大道を履踐する才識をも備へたるものなるべけれど、或はかの不良の徒の教唆により、或はその一身の不遇により、その不平の念を高め、つひに一轉して、悲憤の念を懷き、再轉して叛亂の心を生ずるに至りしならん。而して、その名を問へば、則ちいはく西郷の爲にするなりと。

情勢既にこゝに至る。君が平生故舊に篤き情は、空しくこれを看過して、ひとり餘生を完うするに忍びざりしならん。されば君の志は、はじめより生命を以て壯士輩に與へんと期せしに外ならざりしならん。君が人生の毀譽を度外に置き、天下後世の議論をも顧みざるもの、故なきにあらず。

嗚呼君の心事まことに悲しからずや。有朋、殊に君を知ること深きが故に、君がために悲しむ心また甚だ切なり。然れども事既にこゝに至る。これをいふとも何の益かあらん。

顧みれば、交戰以來既に數月を過ぐ。兩軍の死傷日々幾百なるを知らず。朋友相殺し、骨肉相食み、人の忍ぶべからざるを忍ぶなど、古來例なき戰なり。しかして戰士の心を問

へば、共に寸毫の恨あるにあらず。たゞ王師は兵隊の職務のために、薩軍はその師西郷の爲に戰ふといふに過ぎず。それ一國の壯士を率ゐてよく天下の大軍に抗し、劇戰數旬百折撓まざるもの、既に以て君が威名の實を天下に示すに足れり。而して今や、君の麾下の勇將概ね皆死傷し、その軍威日々に衰へんとす。　薩軍の遂に志を成すこと能はざるは既に明らかなるにあらずや。　君更に何の望ありてか、徒に守戰を事とせんとはする。　若し人の、「西郷は事の成らざるを知れども、しばらくその餘生を永くせんが爲に、敢て千百の死傷を兩軍より出すを辭せざるなり。」といふものあらば、有朋それに向ひて何とか答へん。

山縣有朋　長州の士。維新に際して功あり。陸軍大將大勳位元帥。樞密院議長に至る。大正十一年歿、八十五歳

願はくは、君早く自ら圖りて、一はこの擧の君が素志にあらざるを明かにし、一は兩軍の死傷を明日に救ふの計をなせ。嗚呼天下の君を議する實に極まれりといふべし。　國憲の存する處、自ら然らざるを得ずと雖も、思ふに君の心事を知るもの、ひとり有朋のみにあらざらん。　然らば何ぞ公論の他年に定まるなきを憂へん。　故舊の情、有朋切にこれを君に冀望せざるを得ず。　書に對して涕泣雨の如く、言はんと欲するところを盡すこと能はず、君少しく有朋が情懷の苦を察せよ。　頓首再拜。

（山縣有朋）

二一　月雪花　その一

煌々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、皎潔崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の影、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡る事は、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「うちむかふ月は一つの影ながら浮ぶはちゝの思なりけり」である。

うちむかふの歌　荷田春滿の女、蒼生子（タミコ）の歌

東西古今、悲喜哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち滿ちて居る。天文學者はいふ、「月は地球の衞星で、全く死んだ冷塊である」と。この冷たい光が、古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又

現に與へてゐるか。月は永久に人間の良友である。雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。

高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山」といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、またゝく中に瓊玉を敷

花ならばの歌　新續古今集、僧仙覺の歌

三千世界銀成色の詩　唐の詩人。白樂天の詩句

廣寒宮　月の中にあるといふ宮殿

く壯嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々のながめは、もとより美しいに相違ないい。花の散つた後の新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も靑葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど樂しいものではなからう。

二二　月雪花　その二

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこ

そ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざまどれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へて居る。人生に花なくんば、どれほど寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を離れぬのである。月雪の眺は、その皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基いた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はたゞ「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと信ずる。

花をしの歌　年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし（古今集、藤原良房）

月雪花三つのながめは、各その特長がある、いづれを前、いづれを後といふことが出來ぬ。

山櫻の歌　新古今集、康資王の母の歌

山櫻花の下風吹きにけり
　木のもとごとの雪のむらぎえ

冬ながらの歌　古今集、清原深養父の歌

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは

雲のあなたは春にやあるらむ

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し吳山の雪、鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

笠は重し云云　謠曲、葛城の句

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は卽ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を樂しましめるものも無い。又これに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民は、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。」

アイスランド　北大西洋中の一島

月雪花の眺は、古人の歷史が加つて一層の感興が增す。「世世を經てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月」

世々を經ての歌　伊藤仁齋の歌

月は古來の歷史を照す鏡である。「年々歲々花相似、歲々年年人不同」。人生の感は花を見て益、繁く、雪を見て愈、多い。

年々歲々云云　唐の劉廷芝の代悲白頭翁の詩中の句

二千五百年以來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を、我等に傳へたるよ。如何に多

くの追慕を我等に催さしむるよ。

（芳賀矢一―雪月花）

芳賀矢一
文學博士。國文學者

二三　かりがね

さもあらばあれ鶯の
たくみの奥は盡さねど
又は深山の駒鳥の
しらべの程はうたはねど
まづ飾なき一聲に
涙を誘ふ秋のかり
長き嘆はもらすとも
なほ餘りある悲を
移すよしなき汝が身か
などかく秋を呼ぶ聲の
荒き響をもたらして
人の心を亂すらん
あゝ秋の日の淋しさは
小鹿の知れるかぎりかは
すゞしき風に驚きて
羽袖もいとゞ冷やかに
百千の鳥の群を出で
浮べる雲に慣るゝかな
菊より落つる花片は

島崎藤村
名は春樹。詩人。小説家

汝が啄むにまかせたり
時雨に染むるもみぢばは
汝が翳すにまかせたり
聲を放ちて叫ぶとも
誰かいましを止むべき
星はあしたに冷やかに
露はゆふべにいと白し
風に隨ふ桐の葉の
枝に別れて散るごとく
御空の海にうらぶれて
立ちかへり鳴け秋の雁金

（島崎藤村―藤村詩集）

日蓮上人
安房の人。法華宗の開祖

二四　日蓮上人

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、「法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり」。と喝破し、眼中權勢もなく威武もなき、眞に高天闊地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人

が人情に篤く、恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江馬遠江守の老臣ありき。

日蓮上人像
身延山奥院藏

日蓮上人

この人、武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て、上人と共にもろ〳〵の迫害

四條金吾
本名頼基
江馬遠江守
名は光時

龍口
相模國鎌倉郡
川口村にある

を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中「殿にして、若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂を捉へて淨土に迎ふとも、ふりかへつて必ず殿と共に地獄に現ずべし」との意を述べられたり。その恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現はれ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間五十餘町の嶮山を、一日もかゝさず一日に一度は必ず攀登りて、遙に上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中に、これと比較し得べき美談ありや。

身延山　甲州南巨摩郡にある。今久遠寺のある所

房州　安房國小湊村が日蓮の誕生地である

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より乘馬一匹に舍人一人を添へて遣されけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて

池上　武州荏原郡にある。本門寺のある所

波木井氏　甲斐の人。南部實長の事。身延山の地は此の人が日蓮に贈つたもの

波木井殿に送る書の中にも、馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、をはりに、「知らぬ舍人を附け候ては覺束なく覺え候。罷歸り候はむまで、この舍人を附けおき候はむと存候」と、しるされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくばかの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し、融會して、こゝに豪傑の全人格をつくるなり。かの麗しき薔薇の織物を見ずや、表に花

と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲卽ち刺を織る絲なるにあらずや。（高山樗牛―樗牛全集）

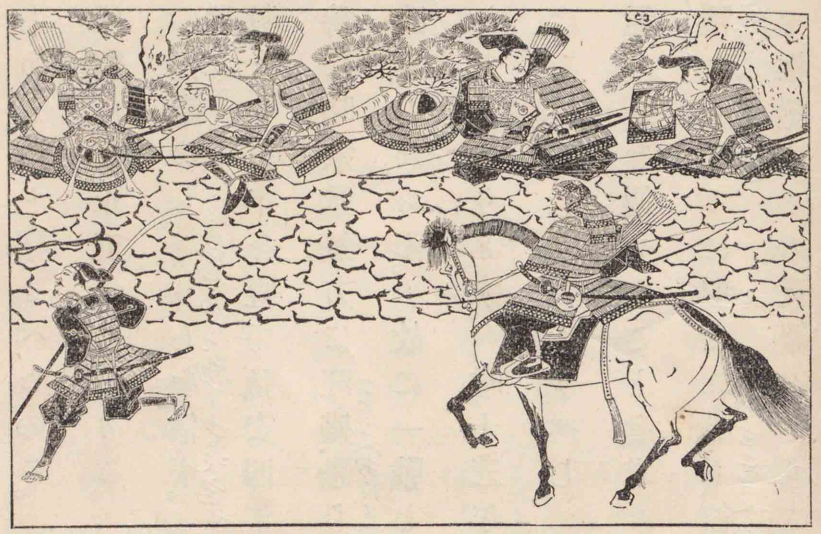
高山樗牛　名は林次郎。文學博士。明治三十五年歿、三十五歳

二五　元寇　その一

日露戰役の酣なりし時、朝廷は北條時宗に從一位を追贈せさせ給ひぬ。

北條時宗　時頼の長子。北條第七代の執權

おもふに元は國を滅すこと四十有餘、能くその呑噬を免れたるものあらざりき。しかも我一たび此と干戈を交ふるや、之を擊破してまた近海に出沒すること能はざらしめぬ。元、使者を遣して好を通ずるを求め、時宗斷乎として之を拒めり。かくて、戰端はこゝに開かれたり。此に就きて自ら



元寇繪卷　その一

三個の疑問の出づるあり。その一、拒絶は果して時宗の意志に出でしか。その二、拒絶は果して道理を具へしか。その三、拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて考ふるに、拒絶は時宗一人の志よりせしにあらず、當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せし所にして、寧ろ國是の然ら

文永五年　龜山天皇の御代（一二六八）

弘安四年　後宇多天皇の御代（一二八一）

しめし所と謂ふべきのみ。初め元の我に使者を遣したるは、實に文永五年にありき。時宗甫めて十八、余はその拒絶の獨斷ならざりしを信ず。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を經て弘安四年に至り、終に大擧して入寇す。時に時宗意氣方に旺盛、恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戰して元兵を靈にしたるは、時宗與りて功ありとす。唯十三年間同一の方針なりしは、國論の之を致ししものとすべし。

元の好を通ぜんことを求め、而して我の之を拒絶せしは、稍、穩ならざるに似たれども、彼の國書を閲するに、實に我に於て拒絶するの已むべからざりしを知るべし。その書や文

高麗　今の朝鮮

不遜の國書

高麗朕之東藩也。日本通二高麗一、開國以來、時通二中國一。至二於朕身一、無二一乗之使一。以通二和好一、尚恐二國王知之未一レ審。故特遣使持書布二告朕心一。冀自今以往、通二聘問一、結二好以相親睦一。且聖人以二四海一爲レ家、不二相通好一豈一家理乎。以至用レ兵、夫孰所レ好乎。王其圖之。（國書節錄）

辭堂々、恩威竝び具る。彼必ず以て、我を心服せしむるに足ると爲しゝならんも、顧みて我が日本の歴史より察すれば、全然拒絶するのほか、他に採るべき策あらず。その「問を通じ好を結び、以て相親睦せん」といへるは、辭として難ずべきものなけれど、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視する態あるは、その語に明かなり。彼自ら何の異とする所あらざるべしと雖も、我に在りては、古來未だ彼の如き不遜の國書に接したることあらず。怒らざらんと欲するも豈能く得んや。當時彼の國書を覽し者、人として書辭の不遜なるを咎め且憤らざりしは無かりしならん。國土面積の廣狹相懸隔するの著しきをおもひて、國力を誤信せし者は、成る

べく圓滑に局を結ばしめんとして開戰に躊躇したらんも理非は既に明白なりしなり。元主使者を派して我を促し、我之を斬りて首を梟せしかば、その怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在りて已むを得ざりし所ならん。則ち已むを得ざりし所ならんと雖も、その此に出でたるは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若し能く我が國情に通ぜしならんには、決して此に出でざりしなるべし。彼既に戰を開くに決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颶風俄に起り、兵船多く覆沒す。我が兵之に乘じて襲擊し、殆ど之を殲滅せり。乃ち言ふ者あり。「當時若し颶風の起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん」と。言者の說にして當れりとせば、則ちかの開戰に決せしは策の宜しきを得ざりしものと謂ふべけれど、而もその言ふ所や實に謬れるの甚だしきものにして、我が開戰に決せしは必勝の算ありしなり。假に颶風起らずして、彼の陸兵みな上陸し得たりとせば、彼我の勝劣則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於て少からざれど、かばかりの軍隊を以て能く日本征服の功を擧げ得べきか。

二六　元寇　その二

元の時代は支那古今を通じて造船術の最も發達せし時といはれ、我に寇せし兵船はコロンブスのアメリカ發見に用

ひしものより、尙堅固なりきと傳へらるれど、その颶風に遭ひて多く破壞せしに觀るも、以て略、構造の如何を察するに足らずや。

彼累りに諸邦を征服せしも、かく多數の兵船を運用せしことは曾てこれ無し。

また彼が操船に巧なりしかも疑なきを得ず。

既に十萬二十萬の軍隊を送遣せし後、猶絕えず兵站の連繼を過たざること、果してその能くするを得る所なるか。「糧を敵に因るの心算なりきとするも、全軍を支ふるに足るべき食料

糧を敵に云云

善用レ兵者、役不ニ再籍一、糧不ニ三載一、取ニ用於國一、因ニ糧於敵一。故軍食可レ足也（孫子作戰篇）

元寇繪卷　その二

を徵發するは、頗る困難の業ならずや。

營に軍隊給養の難きのみにあらず、彼我交戰の結果、彼また勝つべからざる運命ありしなり。

承久の亂、北條氏の兵畿內を指して西上せし者十九萬人、若し此に關西の兵を合せば、數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。

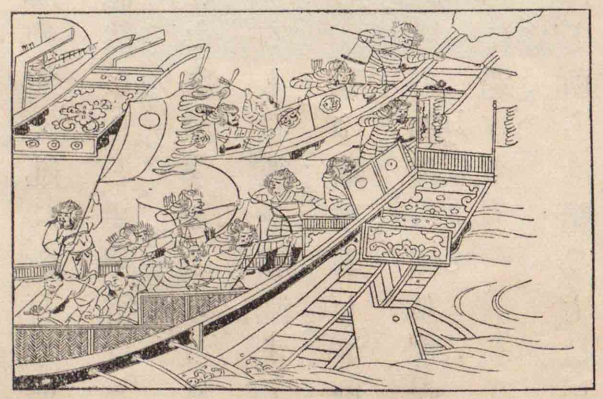
加ふるに、我は地理に精しく、便利を占むる事亦多し。十萬二十萬の元兵を擊摧するに於て何か有るべき。

戰亂を見ざること五十餘年に亙りしと雖も、

承久の亂

仲恭天皇の承久三年（一八二）

元寇繪卷　その三



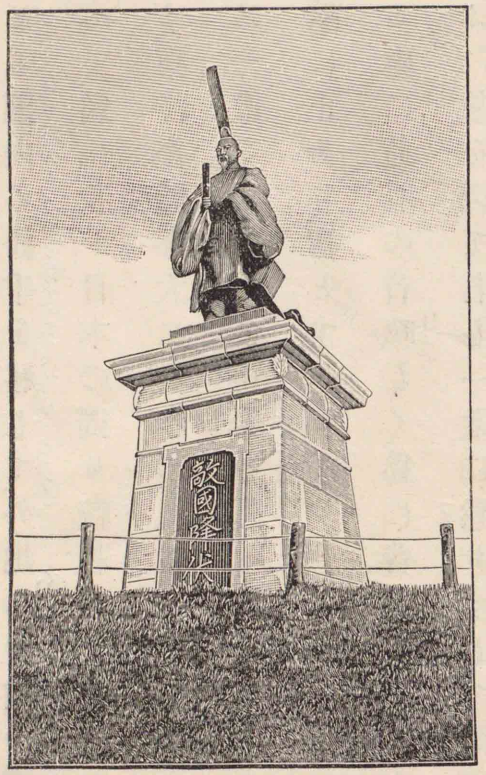
國を擧げて武門の治を享け、未だ嘗て一日も武を練るを怠らず。爾後久しきを經ずして、天下麻の如く亂れ、數百年間唯戰爭をこれ事とせしもの、決して偶然なりとせず、當時こ

元寇記念像
龜山上皇の御銅像・筑前博多の海岸にある

の鬱勃たる士氣を以て元兵に對す、之を殲滅するは寧ろ易易たりしなり。如何なる點より察するも、我、彼を殲滅するの理ありて、彼、我を征服するの恐なし。我の斷乎として拒絶せる、決して無謀の擧にあらず。神風の加護に賴りて幸に勝ちたりと思惟するが如きは謬想に過ぎず。

龜山上皇の御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひしはいともかしこし。既に上皇の御身を以て國難に代らんとし給ふを目睹す、國内の民誰か奮つて國に殉ぜんとせざらん。

之がために上下擧りて國難に當らんとの決心を固めたるや疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來りしとせんか。乃ち我が兵の如何に勇を鼓して邀撃せしかは知るべきなり。



元寇記念像

その海上に於けると同じく、之を陸上に鏖殺したるや必するに難からず。颶風の起りしは幸といふよりも寧ろ不幸といふべし。元

兵にして上陸したらんには、我初め多少の苦戰あらんも、終に全勝を制し、更に勢に乘じて高麗を略し、かくて漸く醞釀せる國内の紛爭を移して、外地の經略を事としたりしなるべく、爲に我が日本の獨り較著なる發達を遂げしのみならず、東洋全體亦大に進歩の見るべきものありしならん。元は一敗して後、更に再擧を圖らんとせしが、諫むる者ありて遂に止めり、智とすべきなり。この一役に於てだに海岸到る處に造船の音喧しく、爲に費しゝ所莫大の額なりきと傳ふ。故を以て若し一敗に懲りずして再擧を圖り、一層の準備を整へて我が國に來寇せしならば、國力の底を傾くるに至りしは疑ふべからず。何ぞ八十年後に分割せらるゝを

八十年後云云　この役後七十八年にて元滅びて明朝立つ

三宅雄二郎　號は雪嶺。文學博士

待たんや。

（三宅雄二郎―小泡十種）

大正國語讀本　卷五終

大正國語讀本第三修正版　全拾册
卷五　定價金參拾九錢
大正十五年度臨時定價　金六拾六錢

大正五年九月廿八日發行
大正七年十二月十五日修正再版發行
大正十二年一月十六日第二修正訂正發行
大正十四年九月十八日第三修正版發行
大正十四年十一月廿四日第三修正訂正印刷
大正十四年十一月廿八日第三修正訂正發行

著作權所有

著作者　東京市外中野町字大塚一六二五番地　保科孝一

發行者　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十八番地　白井赫太郎

印刷所　精興社

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院　振替口座（東京）七四二一番

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　目黑書店　振替口座（東京）二八〇九番

T. TAKAHAISHI